

595  
253

595-253  
  
1200501527433





15. 5. 30



# 救の魂靈

著 平 軍 室 山 將 少



田 神 京 東  
部 給 供 及 版 出 軍 世 救



数の理

新編算術

著者 山本 武

出版者 山本 武



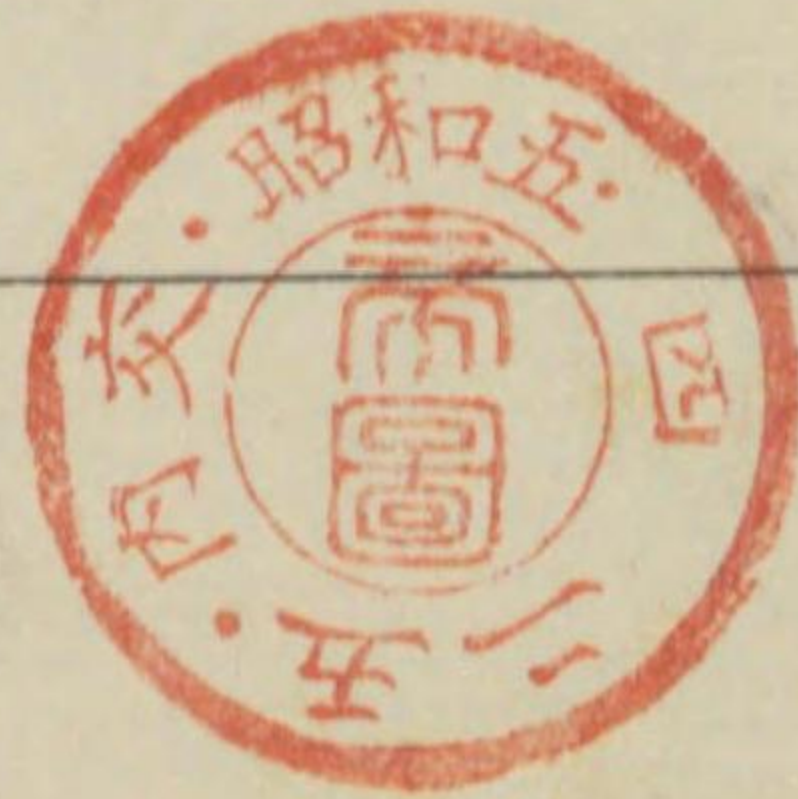


靈魂の救

少將山室軍平著

東京神田

救世軍出版及供給部





f95-253

序

「ひとり人の靈魂が救はるゝ時、大英帝國が亡んでも亡びぬものが、救はれたのである」と、大將ブラムエル・ブースは言はれた。一人の靈魂は、全世界よりも貴きものだからである。

天の父は靈魂の救の爲に、その大御心を惱まして居給ふ。「此の小さい者の一人の亡ぶるは、天に在す汝等の父の御意にあらず」と、教へられた通りである。

救主耶蘇は靈魂の救の爲に、其の貴き血汐を流し給うた。「人の子の來れるも、事へらるゝ爲にあらず、反つて事ふることを

序



序  
なし、又多くの人の贖償をして、己が生命を與へん爲なり」と  
仰せられたのは、それである。

昔から神に忠義なる聖徒たちは、皆靈魂の救を何よりの大事  
として、其の爲に一方ならぬ苦心をしたものである。即ち使徒  
パウロが、「若し我が兄弟、我が骨肉のためにならんには、我自  
ら誼はれて、基督に棄てらるゝも亦願ふ所なり」というたのも、  
フランス・ザヴィエーが、「一人の靈魂の救はるゝ爲には、一  
千度の鞭撻をも我は厭はぬ」というたのも、ジョージ・ホイッ  
トフィールドが、「我に靈魂を與へよ、然らざれば死を與へよ」と  
祈つたのも、救世軍の創立者が「眞一文字に靈魂に往け、而し

て極悪人に往け」と叫んだのも、皆此の靈魂に對する熱情の發  
露にあらざるはない。

「靈魂の救」は去る數年間に亘り、救世軍の機關新聞「ときここ  
る」に掲げた短文、五十篇を編纂したもので、其の文章結構等  
は不出來であれど、其の目的とする所は、如何にもして、罪に  
亡ぶる一人の靈魂をも神に立歸らせたい、といふより他はない  
のである。

神の御惠此の書の上により、能く幾分でも、著者本來の精神  
を實現せしめ給はんことを、切に祈るものである

昭和五年三月二十日

著者



一、神の靈を救へ  
 二、親ごゝろの神  
 三、汝の靈魂を救へ  
 四、悔改めずば亡ぶべし  
 五、救  
 六、新約書中の富士の山  
 七、罪人を救はん爲に來る  
 八、迷へる羊を尋ねて  
 九、鍵と鍵

# 靈魂の救

## 目次

一	神	一
二	親ごゝろの神	六
三	汝の靈魂を救へ	一〇
四	悔改めずば亡ぶべし	一五
五	救	二〇
六	新約書中の富士の山	二五
七	罪人を救はん爲に來る	三〇
八	迷へる羊を尋ねて	三五
九	鍵と鍵	三九



一〇	義人は信仰によりて生くべし	四
一一	人生意氣に感ず	四九
一二	差別あることなし	五四
一三	賴山陽とジョン・ニュートン	五八
一四	國母陛下の聖聽に達したる悔改美談	六三
一五	美 貌	七一
一六	金 錢	七六
一七	禁酒の實行力	八〇
一八	行詰りから希望へ	八八
一九	幸福に生くる道	九二
二〇	自殺す可からず	九七
二一	明るい生活	一〇二
二二	一 羽 の 雀	一〇六
二三	愛 の 鞭	一一二
二四	貧しき者の福音	一一七
二五	隣 人 愛	一二二
二六	基督教の小乗大乘	一二六
二七	最も大なるもの	一三一
二八	いと小き者の一人	一三六
二九	神の愛國者	一四一
三〇	基督教の感化と國難	一四五
三一	一人の献身的努力	一五〇
三二	汝の母の祈を記憶せよ	一五六
三三	兒童に宗教を興へよ	一六〇



三四 人生の分岐點……………一六五

三五 己に克ちて人に盡す……………一七〇

三六 感謝の生活……………一七五

三七 財産を以てする奉仕……………一八〇

三八 笑門福來る……………一八五

三九 山のぼり……………一九〇

四〇 海の教訓……………一九四

四一 大震災を偲びて……………一九九

四二 年の暮……………二〇四

四三 汝の神に會ふ準備せよ……………二〇九

四四 死に對する考察……………二二四

四五 我が父の家……………二二二

四六 兒を喪ひし親へ……………二二六

四七 天國には海がない……………二三一

四八 救世軍の創立者を憶ふ……………二三六

四九 靈魂を思ふ熱情……………二四一

五〇 何故社會事業を營むか……………二四六



# 靈魂の救

山室軍平著

神



静しづかに天地自然てんちしぜんを觀みれば、どうしても其その奥おくに唯一たひひとりの、力ちからある、貴たふとき神様かみさまのお在いに  
 なることを、認まめなわけには行ゆかない。それ故ゆゑ基督キリストの御言おんことばに、「天てんの父ちちは其その  
 目めを惡あしき者ものの上うへにも、善よき者ものの上うへにも昇のらせ、雨あめを正ただしき者ものにも、正ただしからぬ  
 者ものにも降ふらせ給たまふなり」とか。又また「二羽ふたはの雀すずめは一錢せんにて賣うるにあらずや、然しかるに  
 汝等なんぢらの父ちちの許ゆるさなくば、其その一羽ひとも地ちに落おつることなからん。この故ゆゑに懼おそるな、汝  
 等は多おほくの雀すずめより優すぐるゝなり」と宣のたまうて、天地自然てんちしぜんの間あひだにあらはれた神様かみさまの御  
 愛心あいしんと、其その御攝理ごせつりとを教をしへ給たまうたのである。

神



ナポレオンが埃及に出征した歸途に、一夜、船の甲板へ散歩に出ると、そこに幾人かの若い士官が集つて、今しも神様が有るとか、無いとかいふ議論を闘はして居る最中であつたが。其の中の一人が、ナポレオンのそこに現れたのを見て、「閣下は此の問題に就いて、いかがお考になりますか」と、問うと。ナポレオンはほゝゑみつゝ、天にきらめく星辰を指し、「若し神様がないなら、どうしてあんなものが、天に懸つて居るか」というた。ナポレオンは決して模範的の信仰家でも、何でもなかつたが、それでも神様のお在になることだけは、はつきりと認めて居つたらしいのである。

探検家マンゴ・パークは、アフリカの内地を奥へ奥へと入り込んで、五百哩以内、一人の白人を見ない所に行つた時、盜賊に出あひ、携へ來つた物資を殘らず掠めとられた上に、其の引率した従者らと離れ、道を失うて野原にさまよひ、食物はなくなる、身體は疲勞する、最早奈何ともし得ない破目に陥り、全く絶望に至らんとする際、忽ち脚下に、人さし指くらゐの大きな草花を見付けた。しかもそれが如何にも巧妙に、優美に出來て居るのを目をとめ、此の名もなき、小き草花にさへ、これだけの扮装をなさしめ、之に養分を與へ、之を保護しておき給ふ神様は、屹度亦私をも憶え、何とか保護を加へて下さるに相違ないと。今一度元氣を奮ひ起して猛進を續けると、間もなく土人の小き村に出で、今一度自分が引率して來た二人の男にもめぐり合せて、不思議に餓死を免れたといふことである。それ故テニソンの短い詩に「塀の裂け目に生えた一莖の草花を、根からもぎとつて掌上におき、之を眺めて、その草花は何かといふことを眞實に理解すれば、神及び人は何かといふことが、解るであらう」というてある。

リンネアスは、有名な植物學者であつたが、平生草の花だの木の花だの葉だの葉だのに關する研究の結果を、著述するに當つて、いつでもフロツクコートを着用した。といふわけは、靜に目をとめて見ると、それらの一枚の木の葉にも、又一輪の草花にも、



それぞれ人間業ならぬ、貴き神様の智慧と能力とが現れて居るゆゑ、それを思ふと、勿體なくて、敬虔の念なしには、それらに關して、筆を執ることが出来なかつたからである。歌に「咲く花を歌によむ人、ほむる人、咲かす花のもとを知れかし。」又「何の木の花とも知れぬ香かな」などあり。靜に天地自然を觀れば、これは決して偶然出來合の細工ではなくて、どうしても愛と智慧とに富んだ、力ある神様の御作でなくてはならないことを、心に感せしめらるゝ。

私共が既に此の世界に、貴き、唯一の神様のお在になることを知つたなら、どうすべきかといふに、先づ第一に私共は其の神様を崇め尊ばねばならぬ。第二には其の神様の前に、清く正しき生活をいとなみ、神様の御意を喜ばせつつ、毎日を通すものとならねばならぬ。而して第三に、今一つ大切なるは、私共が一切萬事を其の大なる神様の御手に任せ、何等思ひ煩ふ所なく、安心して此の世を渡るべきことである。マルチン・ルーテルは其の宗教改革の事業の爲に、八方か

ら敵をうけて苦みぬいたのであれど、尙神様が正しい人を守り給ふことを信じ、毫も疑ふ所がなかつた。その頃或日、彼は小禽が埒につかんとするのを眺めつゝ、言うた。「あの小禽は翼をすばめ、首を其の中に突込んで、安らかに眠り、あとは一切神様にお任せ申して惑はない。これは私共が、神様に信任すべきことに就いて、大なる教訓を與ふるものである」と。

それであるから私共も神様を敬ひ尊び、其の御意を行ひ、又其の御力に信賴して、眞に善良、有用、幸福なる生活を営まねばならぬ。即ち聖書に「汝等鼻より息の出入する人に倚ることを止めよ。かゝる者は何ぞ數ふるに足らん。」又「エホバに依頼むは、人に依頼むよりも優りて善し」などと教へてあるのは、其の事ではないか。



## 二 親ごころの神

ギリシヤの神話に、ジュピターといふ神様が、あらゆる動物に命令を下し、「お前たちの中で、一番可愛い顔した子をもつた者は連れて来い」というと。あちらから、こちらからも、種々なる動物が、何れも我が子こそ、一番可愛い顔して居りますると、言はんばかりに、自慢しながら連れて来る。其の中に真赤な顔した醜い親猿が、同じやうに真赤な顔した醜い子猿を抱いて来るのが、いかにも滑稽であるから、他の動物が見兼ねて親猿にむかひ、「お前さん、そんな顔した子が、一番可愛い顔して居ると思ふのか」と尋ねると。答へて「他のお方にはどう見えるか知りませんが、親の私に取つては、此の子くらゐ可愛い顔した者は、どこにも居りません」と、いうたとある。

此は可笑い話のやうだが、其の中に眞理がある。一體親が子を愛するのは、他の人が或る他の人を愛するのと、ちがふ所がある。他の人が他の人を愛するのは、時として、其の才能力量を愛するのである。又は其の學問や知識を愛するのである。其の顔付を愛するのである。或る場合には、其の懐の金を愛することさへ、あるかも知れない。しかし乍ら親が子を愛するのは、子だから之を愛するのである。それ故學問や才能のある子を愛するのみならず、そんなものゝない子をも愛するのである。顔付の奇麗な子を愛するのみならず、見つともない子をも矢張愛するのである。否、否、諺に「片輪の子ほど尙可愛い」といふ如く、親は他人からは見はなさるゝやうな片輪者をさへ、尙我が子であるから、之をいとしがるのである。丁度其の如く、天の父なる神様は、亦私共人間をいつくしみ給ふ。即ち私共に學問才能があるからでもなく、私共の顔付が奇麗なからでもなく、私共が神の子だから愛し給ふのである。此の意味に於て、神様は一視同仁である。白哲人種であらうと、有色人種であらうと、資本家であらうと、労働者であ



らうと、男も、女も、老も、若も、悉く皆神の前には、いとしい其の子供である。神様は私共人間を子として愛し、現に其の思召に逆うて、罪に罪を重ねるものさへ、人の親が片輪の子を愛すると同じ慈愛を以て、愛し給ふのである。罪の増す所には恵もいや増せり」とあるのは、ここの道理である。

それであるから、神様は其の獨子基督を世につかはし、私共の罪を戒め、信仰の道を傳へ、悔改めて救を求むべきことを示した末に、十字架にかゝつて死んで迄も、人助けの爲に盡させ給うたのである。これは全く神様の御愛心から出た御計らひである。いかなる罪深い者も、之によつて罪を赦され、心を新にせられ、前とは打つて變つた善人となり、心には安心を樂み、身には幸福を経験し、死んだ先では又、盡きぬ命をつがるゝやうにとの、有難い神様の御導である。

二宮尊徳が、まだ金次郎と呼ばれた、少年時代のことであるが、彼は早く其の父に死に別れ、あとには母と赤坊とをのこされた。所が金次郎は尙幼く、母は赤坊を抱へて居ては、思ふやうに仕事が出来ないから、種々思案の結果、赤坊を親戚の許にやつてしまはれた。が其の夜母は赤坊が氣になつて、夜どほし一睡もするこゝと能はず、寢返をしては、ため息のみついて居られるのを、金次郎は聞きつけて「お母さん、どうしましたか。」といふと、「乳が張つて寝られない」と、言はれた。すると彼は「お母さん、親子は矢張り一緒に居た方がよいと思ひます。私は明日から大人に負けないほど働きますから、どうか赤坊を取戻して、一緒に居ることにして下さい」といひ、以來不自由しながらも、親子三人揃うて、一緒に幸福な日を過したと傳へられて居る。今懷に居る筈の赤坊が居ない爲に、心細く物悲しく覺えた母の心は、即ち天の父なる神様が、其の思召を忘れて罪の行をなし、滅亡の途を辿る諸君に對してもち給ふ、御心の中である。神様は諸君一人一人を其の大御心に留めて、之を愛し、之を憂へて、切に其の救の爲に御苦心遊ばされて居るのである。諸君は速に此の慈愛の天父に立歸られねばならぬ。



### 三 汝の靈魂を救へ

パスカルの言に「天體も、地球も、動物も、植物も、礦物も、一切の物は、一箇の靈魂に比較するに足りない。何となれば、それらの物は自らを知らないけれども、靈魂は自らを知り、又それらの物を知るからである」というてある。此の如く、人には神様に肖せて造られた靈魂が宿つて居る。而して「一人の靈魂は、全世界にも換えられない程貴いものである」と、基督は教へ給うたのである。

第一、人が其の靈魂を粗末にして居る間は、決して胸の中に安心がない。「人の生くるはパンのみによるにあらず」というて、人間は幾ら物質上に不自由なき生活をして、それだけでは心に満足を感じられない。況んや物質上に迄、不自由のみ多いやうでは、尙更やり切れないのである。人の心は神様を見出し、神様と親子の親しき間柄となつて、始めて本當の安心を得らるゝものである。カーライルの説に、「こゝに一人の貧しい靴直しが居るとして、歐羅巴諸國の大藏大臣が資金を出し、歐羅巴諸國の家具商が入用な品物を提供し、又歐羅巴諸國の食料商人が飲食物を供給して、彼一人を幸福にしやうと努力しても、能く數時間以上は成功しないであらう。なぜかといふに、其の貧しい靴直しには、物質だけで満足さすことの出来ない、貴い靈魂が宿つて居るからである」と、いうてある。それ故に眞に安心満足をして、此の世を渡りたいと願ふ人は、何よりも先づその靈魂の救を求めねばならぬ。

第二、人は又其の靈魂を粗末にして居るやうでは、満足に此の世の生活を営むことが出来ない。元來事業は人である。人間のすることなす事は、つまり皆其の人の人格のあらはれである。それ故に誤魔化しの人間は、誤魔化しの品を造るのである。又申譯や、義理づくで仕事をする人は、兎角其の場のがれの、見かけばかりの、勞働しかないのは、理の最も見易き所である。それ故人は神様を知り、

汝の靈魂を救へ



罪を悔改めて、神様を相手に清く正しき生活を営むやうになつて、始めて蔭日向のない、眞の人格精神をうち込んだ、事業らしき事業を経営し得るに至るのである。いつぞやも或る刑務所で、最も危険性を帯びた囚人二十人とかを、北海道に護送するに當り、一番信頼すべき看守を擇んで其の六つかしい役目を命じた後で、氣がついて見たら、それは救世軍の兵士であつた、といふ話を聞いたことがある。眞の事業は口先や、手先で営むべきものでなく、必ずその人格、精神を以て之を営むべき筈のもので、平生己が靈魂を粗末にして居る様な人には、此の世の生活さへ、満足には、営み得ないものと思はねばならぬ。

第三、しかのみならず、私共が此の世に生き存らへるのは、つまり其の靈魂を救はん爲に外ならない。諺に「可愛い子には旅をさせろ」といふことがあり。天の父なる神様が、私共といふ子供らを此の世に送り、三十年、五十年の長い旅路をさせて置き給ふわけは、畢竟私共をして、其の間に鍊られたり、鍛えられたりし

て、それぞれ皆、一人前の人間らしい人間にならしめん爲の思召である。或人の説に、「人間の一生は牛肉のすき焼と似て居る。すき焼は肉が焦げつきさうになると、ひつくり返し、又、ひつくり返して居る間に、好い味が出る。それと同じやうに、人間の一生は又、名譽に焦げつきさうになると、ひつくり返し、金錢に焦げつきさうになると、ひつくり返し、浮世の歡樂に焦げつきさうになると、ひつくり返し、さうする間に、私共が、いつしか神様の子供たるにふさはしき、眞の品性を完成するやうにと、其の爲の御取計らひに外ならない」とのことであつた。それ故私共は速に悔改めて、基督の救を受け、其の以來、毎日出あふほどの事柄を課業として、鍊られ、鍛えられて、基督に似た人格を養ひ上げることをつとめねばならぬ。

「**基督は私共の靈魂を、罪と滅亡との中から救はん爲に來り給うた。人の子**來りしは、失せたる者を探ねて救はん爲なり」とあるのは、其の意味である。諸



君はその基督によつて、速に己が靈魂を救はれねばならぬ。然る後一步進んで、今度は他人の靈魂を救ふ爲に、力を盡すものとなられねばならぬ。此の世に靈魂の救に比ぶべき大事はないのである。

### 四 悔改めずば亡ぶべし

「汝等悔改めよ。」「汝等も悔改めずば皆同じく亡ぶべし。」「悔改むる一人の罪人の爲に、神の使たちの前に喜あるべし。」「我は正しき者を招かんとあらで、罪人を招かんとて來れり」などとあり。基督教が如何に悔改といふことに重きを置くかを、知ることが出来るのである。然らば悔改とは何であるか。

第一、悔改とは其の罪を認めることである。アダムは神様から「なせ禁せられた樹の實を食べたか」と問はれて、「妻のエバが食べさせました」といひ、エバに對うて「なせ禁せられた樹の實を食べたか」とお尋になると、「蛇が食べさせました」と、いうたとある。此の如く人は兎角自分の罪を他の者に着せ、「人が悪いのだ」「社會が悪いのだ」「貧乏が悪いのだ」「境遇事情が悪いのだ」とのみ言ひ、一向自分の悪いことを認めないものである。もとより世には、他人の仕向の悪いこ



とも多々あらう、社會が悪いとか、境遇事情が悪いとかいふことも多くあらう。それは本當の事である。がそれにしても、私共は銘々、自分の不了簡、不心得の爲に、最も多くの禍を招いて居る事實を認め、素直に自分の罪を覺らねばならぬ。人はどのやうに外部の生活事情を改善しても、内部に己が心の持方をかへない限り、決して眞に満足、幸福の世渡をすることは、出来ないものである。

第二、其の次に大切なるは、其の罪を悔むことである。何も罪のたたりが恐ろしいから、之を悔むとのみいふのではない。反つて罪其のものが厭であるから、之を悲しむのでありたい。アムブローズの言に、「若し天の使が片手には罪、片手には地獄の刑罰を携へて現れ、是非共二つの中の一つをとれと言ふなら、私は無論罪を棄て、地獄の刑罰をとるであらう」と、いうてある。其の如く私共は罪を憎み、之を厭ひ、自分が犯した罪を、心から悔むやうでなくてはならぬ。

第三、罪を悔むと共に、大切なるは之を改むることである。幾らこれ迄の罪を悲み悔んだかというて、いつまでもくり返し、同じ罪を犯して居つたのでは、役に立たない。所謂「犬己が吐きたる物に歸り來り、豚身を洗ひて復泥の中」にまろぶ」といふ如きことは、世間に多く見る罪人の有様ではないか。しかし乍ら私共肝要なるは、悔改である。嘗にこれ迄の罪を悔悟するのみならず、亦己が力に及ぶ限は、之を改むることである。「罪を改めるなら、最小の悲嘆で足つて居る。けれども罪を改めないなら、最大の悲嘆も何の役に立たない」と、コルトンは戒めて居るのである。

第四、眞に罪を悔改むる者は、及ぶだけ其の罪を辨償せねばならぬ。取税人の長ザアカイが、悔改むると直に、これ迄人から不義をして取つた金を、残らず、四倍にして辨償したといふのは、最も善き模範である。私共の悔改が本當なら、其の妻に、夫に、親に、兄弟に、又友人に對し、これ迄相濟まないことをして居つたのを、一々お詫をして、又力に及ぶかぎり、之を辨償することを心がけねば



ならぬ。

第五、其の次に大切なるは、基督を信仰して、罪から救うて戴くことである。罪から救はるゝとは、これ迄神様の前に犯した罪を、神様から赦していただくことと、又以來心を入れかへられて、これ迄とちがうた、清く正しき生活を営むこととをいふのである。これは基督によつて、神様が私共に賜はる恵である。人間の力では出来ないことだが、神様にはお出来るのである。私共は基督を信じ、罪から救はれ、新に生れた人間となつて後に、始めて所謂「悔改にふさはしき果」を結ぶことが出来る。南アフリカに帝國を打建てたセシル・ローズが、歸英の砌、或時救世軍の一會館を訪ね、其の高壇の前に設けてある悔改の座に目をとめて、「成程これが舊い生活から、新しい生活に移る境界線ですな」といひ、感嘆之を久うした事があつた。いかにも悔改の座は、舊い生活から新しい生活に移る境界線である。悔改めて基督を信仰することは、死より生命に、惡より善に、不安心より安心に、地獄より天國に移る唯一の救である故、諸君もどうか、速に悔改めて、基督を信仰せられたいものである。



五 救

「キリストは救主である、基督の宗教は救の宗教である」といふ。果して然らば私共が、基督に救はるゝとは、どういふ意味であるか。

同じ救といふ中にも、水からの救あり、火からの救あり、病からの救あり、飢からの救あり。救といふ語も、さまざまの場合に用ゐらるゝのであれど、基督の救は此等凡てを合せたよりも、更に大切なる救である。即ち人を罪より救ふ所の救である。

然らば罪とは何かといふに、之には種々なる説明の仕方もあることながら、大體から言へば、何でも我が本心がなせと命ずることを怠りてなさず、又我が本心がなすなと戒むることをわざとなす。これを名づけて罪といふのである。それでは誰が、左様な罪を犯して居るかといふに、此の世の中に、かうした意味の罪を犯

して居ない人間といふは、一人もないのである。即ち「若し罪なしと言はゞ、是自ら欺けるにて、眞理我等の中になし。」又「義人なし、一人だになし。さとき者なく、神を求むる者なし、皆迷ひて相共に空しくなれり。善をなす者なし、一人だになし」とあるのは、其の事である。神様の前に罪人でないものは、此の世に一人だもないのである。恐ろしいことではないか。

人は皆自分が犯した罪の爲に、あらゆる禍を身に受けて居るのである。私共は己が犯せる罪の爲に、胸に安心満足がない。いつも煩悶と不安とに満されて居るのである。又重ね重ねの災難を其の身に招き、人には良くない手本を見せた上、之に種々なる迷惑をかけ、しまひには滅亡におちて行くのである。即ち聖書に「汝等各己の罪に死なん。」「罪の拂ふ價は死なり。」又「其の罪を隠す者は榮ゆることなし、されどいひあらはして之を離るゝ者は、あはれみを受けん。」などとある通りである。



然らば基督が人を罪から救ひ給ふとは、如何なることかといふに、これに凡そ二つの意味があり、第一、物心がついてから今日迄、私共が犯せる罪を凡て皆、帳消しにしていたゞくことである。第二、以來神様の御力により、心を入れかへられて、新しき生活に入ることである。今少し其のことわけを言はん、人は皆幼い時からけふが日迄、山なす罪を重ね、之を奈何ともし得ないのである。昔の人は其の罪深い事に心付いた時、難行苦行をしたり、慈喜善捨を行うたり、又は堂宮を建立したりなどして、罪ほろぼしをしようとして試みたものである。しかし乍ら天の神様は、私共が罪と禍とに惱んで居る有様を見て之を憫み、私共をかゝる中から救ひ出さん爲に、獨子基督を世に降し、十字架にかゝつて迄も、人助けの爲に死なせ給うた。それであるから、私共が眞に自分の罪深い事を覺り、悔改めて基督を信仰するに於ては、神様は私共のこれ迄に犯せる罪を皆赦し、之を大目に見て下さる。即ちこれ迄曾てさうした罪を犯した事のなき者同然の、御

扱をなし下さることゝなるのである。これが所謂罪の赦である。

今一つ大切なるは、私共が神様の御力によりて、新に生れることである。人は兎角善と認むることを窮屈がつて行はず、反つて惡とみとむることを行ひ勝ちのものである。けれども神の御靈が來つて私共に働き給ふ時、私共の心と生活とは一變し、今まで窮屈に覺えた善事を喜んで行ひ、又これ迄樂みに思つた惡事を、しんから厭ひ嫌ふやうになる。それ故私共の體は年をとると共に衰ふれども、私共の心は神様の御力によりて年々に若やぎ、今年は去年よりも元氣好く、神様の正道をふみ行ふことが出来るやうになる。これが所謂新に生れるといふものである。昔の人の句に「極無理な異見、たましひいれかへろ」とあり。たましひをいれかへるなどいふ事は、口には言うても、其の實行は六づかしいものとなつて居れど、それを實地に行はしむる道があり、即ち人が悔改めて基督を信仰する時、神様は其の人のこれ迄の罪を赦すのみならず、其の心をいれかへ、前とは見違へ



るやうな、善良で、幸福で、有用な生活に入らせ給ふのである。此うした基督の救を、一日も早く身に受けられんことを、お勧め申上げるのである。

### 六 新約書中の富士の山

新約聖書、ヨハネ福音書第三章十六節は、聖書の中でも殊に最も有名なる一句で、ルーテルは之を「聖書の縮圖」又「小き福音書」と呼び。アンドリュース監督は、「此は至小き室に納められた、絶大の富である」といひ。ムーデーは「此の句さへのこつて居れば、聖書全部がなくなつても、救の道を知るに不自由はなし」など、いうて居る。新島襄氏は亦同じ句を讀んで、基督を信するに至られた人であるが、或時此の一節を呼んで、「此は新約書中の富士の山である」といはれた。

今謹んで其のヨハネ福音第三章十六節を讀んで見るに、實に次の如く録してある。  
「夫神は其の獨子を賜ふ程に、世を愛し給へり。凡て彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得ん爲なり。」



然らば此は又、如何なることを教へられた御言であるかといふに、少く共其の中に五つの大切な教訓を含んで居る。今それを雜と左に説明したいと思ふ。

第一、「夫神は：愛し給へり」とあり、こゝに神様の愛であることが教へてある。神は愛である。天の父上である。此の世に最も有難いものは親心である。モニカは其の子のアウガスチンが、幾ら放蕩の行に陥つても、失望せず、眞實の祈を以て、之が悔改の爲に盡した。果して「涙の子は亡びず。」彼が後にあれほど立派な聖徒となつたのは、主としてモニカの親心の感化であつた。ジョセフイン・バットラー女史が、かよわい婦人の身を以て、あれ程大膽なる廓清運動を試み、終に能く英國の遊廓を全廢するに至らせたのは、亦其の親心の發露であつた。即ち女史は、我が可愛い娘が不慮の災難に死んだのを、いとしいと思ふ心から割出して、世の不幸な人の娘たちに盡されたから、能くあゝした大事業をなされたのであつた。しかし乍ら親心の中最も大なるものは神様の親心である。天の父が子なる人類に對して有ち給ふ、大なる親心であることを知らねばならぬ。

第二、次に「世を愛し給へり」とある。此の「世」といふのは即ち世の人のことである。人は皆神様の子供である。しかしながら神様を忘れ、罪にまよへる人類は、子供は子供ながら放蕩息子同然に墮落して、神様てふ父上の御心を痛めて居るものである。それにも拘らず、神様は尙も、然うした背ける子供らを愛し、放蕩息子同然の人間をいとしと思召すのである。「慈悲の眼に憎しとおもふものぞなき、罪ある身こそ尙憫れなれ」とは、此の謂ではないか。

第三、又「其の獨子を賜ふほどに云々」とあり。此の「獨子」といふのは即ち基督のことである。神様の愛と慈悲とは、此の行届いた天地自然の上に見える。又私共に不思議な肉體を授け、智慧、力量、分別、壽命を與へて、今日に至らせ給ふことによりても知られる。しかし乍ら神様の愛の一番大なる顯現は、其の獨子基督を賜はりたることである。天の父は私共に自らを知らせ、罪を覺らせ、



悔改めて神様に歸り、其の救を受けて、新しき生活に入り、神様と親子の名乗の出来るやう、其の道を開かせん爲に、基督を世に遣し給うたのである。神様の愛は、其の獨子基督を賜うたことによりて、最も確實に知らるゝのである。

第四、又「永遠の生命を得ん爲なり」とあり。基督に絶る者は罪の滅亡を免れて、永遠の生命を與へらるゝ。といふのは、死んだ先で天國の世嗣となるばかりでなく、此の世に居る間から、新しき生命を授けらるゝことである。即ち此の世ながら罪に死に、義に生きて、清く、正しく、安心で、又有用なる生活を営むものとなるのである。「人新に生れずば、神の國を見ること能はず」といふ。其の新に生れた人間にして戴くのが、即ち「永遠の生命を得る」といふものである。眞に忝けない事ではないか。

第五、最後に今一つ「凡て彼を信する者の云々」とあり。此うした有難い恵を身に受けたいと願ふなら、其の條件は唯基督を信仰する他にないことが解る。リチャード・バックスターの言に、こゝに若し「リチャード・バックスターが、基督を信仰すれば救はれる」と書いてあつても、世間は廣いから、どこかに今一人、同名異人があつて、此の句は其の人のことを指したものでないとも限らない。しかし乍らこゝには「凡て彼を信する者」とあるのだから、私さへ若し基督を信仰するならば、私も亦屹度「亡ぶることなくして、永遠の生命を得」らるゝに相違ない、というてある。私は諸君が、亦「凡て」基督を信じて、此の句に約束せられた一切の恵を、我がものとせられんことを願ふのである。即ち諸君が一人のこらす、此の「新約書中の富士の山」の頂上までも攀ぢ登つて、神様の大なる愛の中に住む者となられんことを、心からお勧め申上げるのである。



### 七 罪人を救はん爲に来る

倫敦市外に水晶宮というて、大部分硝子で出来た素破らしい大な建物があり、其の大會館には優に二萬人を容れるのである。或時有名なる説教者スポルジョンが、此の大會館にて演説することを頼まれ、音聲の響き工合等、氣にかゝるものであるから、其の前日、獨で右の大會館に赴き、講壇に立つて、試みに聖書の一句、基督耶穌、罪人を救はん爲に世に來り給へりとは、信すべく、正しく受くべき言なり。其の罪人の中にて我は首なり」(テモ前一・一五)といふ、パウロの言を朗々と暗誦して見ると、大概音響の様子も解つた故、其の儘家に歸つたのであるが、それから幾年も経つて後に知れたことは、其の日一人の硝子職工が、窓硝子の修繕か何か頼まれて、廣い大會館の二階の隅で仕事をして居る最中、忽ち何處よりも知らず、基督耶穌、罪人を救はん爲に來り給へりとは、信すべく

正しく受くべき言なり云々。」といふ聲が耳に響いたから、彼は驚き、周圍を見まはしたけれ共、終に何人の姿をも發見すること能はず、是全く神様が自分の不信仰と、罪の行とを戒め給ふ御聲に相違あるまいと、乃ち悔改めて眞面目な基督者となり、爾來熱心に信仰生活を營んで居るのを、見出したのであつた。

「基督耶穌、罪人を救はん爲に世に來り給へり」とは、基督敎に最も大切な真理である。今此の御言の意味を考へて見るに、第一、耶穌基督といふお方は、たゞの人間でない。神様から特別に遣されて此の世に來り給うた、特別なお人である。しかも罪人を救はん爲に神様から遣された、その御獨子であるといふのが、其の大切な意味である。

第二、然らばこゝに罪人といふのは、誰のことかと尋ぬるに、此の世の人は皆罪人である。「義人なし、一人だになし」とある通り、此の世の人は残らず神様を忘れ、身勝手を行ひ、神様の御意に逆うて居る。神様は父、人は其の子であれ

罪人を救はん爲に来る



ど、今の儘では、子とは言ひながら、道樂息子同然の有様に陥つて居るのである。  
 第三、然らば耶穌基督は、どうして此の罪人を救ひ給ふかといふに、彼は其の爲に、世の人が是非共知らねばならない眞理を説き諭し、世の人が見習ふべき身の行の根本を示し、又いろいろ人助けの爲に御苦勞下された末、十字架の上に血を流して迄も、罪人を天の父なる神様に立歸らするやう、執成して居給ふのである。

第四、それ故人が其の犯せる罪を悔改めて、耶穌基督を信仰するに於ては、神様は其の人の罪を赦し、其の心を入れかへ、これ迄とちがうて、清く正しき人間とならしめ、又安心満足をして、いかにも生き甲斐ある有用の日を過し、最後には永遠の天國に、幸福限りもなき生活を、樂しませ給ふこととなるのである。

パウロは自分で先づ、此の言通りの有難い實驗をした。それ故彼は「基督耶穌、罪人を救はん爲に世に來り給へりとは、信すべく、正しく受くべき言なり。」とい

ふと共に、直ぐ後から、「其の罪人の中我は首なり云々」というて、自分自らの信仰上の證言を立て居るのである。或時英國のケンブリツヂ大學に、ビルネーといふ一學生があり、自分が神様の前に罪深いことを覺るにつけても、どうかして其の中から遁れ出でたいものと、頻りに苦心し、宗教上の儀式を行ふたり、祈禱文を誦んだり、又は難行苦行などして見たが、どうしても満足が得られず、苦しみ悶えた末、聖書を開いて、此の「基督耶穌、罪人を救はん爲に世に來り給へりとは、信すべく、正しく受くべき言なり云々」の一句に至り、豁然として悟る所あり、乃ち謙遜して罪を悔改め、基督を信仰することによりて、其の罪を赦され、心を新にせられ、これ迄夢想だもしなかつた幸福、安心、有用の生活に入る事が出來たので、嬉しさの餘、終には身を献げて宗教の傳道に従事し、相當に成功ある人物となつたといふ話がある。それにつけても、「基督耶穌、罪人を救はん爲に世に來りとは、信すべく、正しく受くべき言である。」諸君が此の言

罪人を救はん爲に來る



を、銘々其の身に經驗し、これ迄思ひも及ばなかつた幸福、有用、安全の生活に入り、末は永遠の生命を享受するに至られんことを、切にお勧め申上げるのである。

### 八 迷へる羊を尋ねて

モーセは舅エテロの家<sup>い</sup>に在<sup>あ</sup>つて、其の羊の群<sup>むれ</sup>を世話<sup>せわ</sup>して居<sup>ゐ</sup>る時、或日一匹の羊が迷<sup>まよ</sup>ひ出<sup>で</sup>て、行衛<sup>ゆくゑ</sup>が知<sup>し</sup>れなくなつた。そこでモーセは心配<sup>しんぱい</sup>し、山<sup>やま</sup>を越<sup>こ</sup>え、谷<sup>たに</sup>を涉<sup>わた</sup>り、種々困難<sup>しゆくこんなん</sup>をして探<sup>さが</sup>した甲斐<sup>かひ</sup>があり、漸<sup>やうや</sup>く之<sup>これ</sup>を見<sup>み</sup>つけ出<sup>いだ</sup>し、喜<sup>よろこ</sup>んで肩<sup>かた</sup>にかけ、連れ歸<sup>かへ</sup>らうとする時、忽<sup>たちま</sup>ち神様<sup>かみさま</sup>の御聲<sup>みこゑ</sup>があり、「モーセよ、汝<sup>なんぢ</sup>は其の一匹<sup>ひき</sup>の羊の爲<sup>ため</sup>に苦心<sup>くるし</sup>したと同じ精神<sup>せいしん</sup>にて、出<sup>で</sup>て行<sup>い</sup>つて二百萬<sup>まん</sup>のイスラエル人民<sup>じんみん</sup>が、奴隸<sup>どれい</sup>の苦<sup>くるし</sup>みをして居<sup>ゐ</sup>るのを救<sup>すく</sup>ひ出<sup>いだ</sup>せ」と宣<sup>のたま</sup>ふのを聞<sup>き</sup>いて、モーセは恐<sup>おそ</sup>れ入り、それからイスラエル人民<sup>じんみん</sup>の濟度<sup>さいど</sup>の爲<sup>ため</sup>に、起<sup>た</sup>ち上<sup>あ</sup>つたといふ傳説<sup>でんせつ</sup>がある。

耶穌基督<sup>イエスキリスト</sup>は、神様<sup>かみさま</sup>を知らずして、罪<sup>つみ</sup>と禍<sup>わざはひ</sup>とに苦しむ世<sup>よ</sup>の人<sup>ひと</sup>を迷<sup>まよ</sup>へる羊<sup>ひつじ</sup>にたとへ、御自分<sup>ごじぶん</sup>のことを牧者<sup>ひつじかひ</sup>に擬<sup>な</sup>へ、自分<sup>じぶん</sup>は迷<sup>まよ</sup>へる羊<sup>ひつじ</sup>の如<sup>ごと</sup>き世<sup>よ</sup>の人<sup>ひと</sup>を救<sup>すく</sup>ふ爲<sup>ため</sup>に來<sup>き</sup>た牧者<sup>かひ</sup>であると、説<sup>と</sup>き給<sup>たま</sup>うた。或時<sup>あるとき</sup>仰<sup>あ</sup>せられた「こゝに百匹<sup>ひゃく</sup>の羊<sup>ひつじ</sup>を所有<sup>しやうりやう</sup>する人<sup>ひと</sup>あらん

迷へる羊を尋ねて





に、其の中の一匹が居なくなると、一匹くらゐどうでも可いとは、決して言はない。必ず手に手を盡して之を探し、見付たならば、肩にかけて連れ歸り、近所の人迄呼んで来て、大騒をして一緒に喜ぶであらう。丁度そんな風に、自分が此の世に來たのは、迷へる羊の如き人間を濟度する爲である。一人の罪ある人が悔改めれば、天で神様の御前に大なる喜がある」との御教であつた。

しかし乍ら、基督が此の世にお出になつたわけは、唯罪人を救ふ爲のみにあらず、反つて既に救はれた人間を保護し、以來どこ迄も善良に、どこ迄も幸福に、又どこ迄も生き甲斐ある、結構な生活をさせてやりたいとの思召である。即ち其の御言に、「我が來るは羊に生命を得しめ、且豊に得しめん爲なり」などとなるのは、それである。それさへ基督は十字架にかゝつて血を流して迄も、頼邊なき羊のやうな私共を救はん爲に、御苦心下されたのである。即ち御自分で又「善き牧者は羊の爲に生命を捨つ」と、仰せられたのはそれである。

ガリバルヂーは、伊太利の豪傑で、其の國が亡んだのを復興する爲に、非常な骨折をした、えらい人であるが、或時そのガリバルヂーが、一隊の兵を連れて、或る地方を通ると、途中で一人の百姓が悲しうな顔して、路傍にため息をついて居るのを見つ、「どうしたか」と尋ねると、「大事な一匹の羊が居なくなりまして。心配でなりません」といふ返事である。それを聞くと義侠心に富んだガリバルヂーは、ひとごとのやうに思はれず、すぐに其の兵に命じ、「手分けて其の羊をさがしてやれ」と觸れ出した。そこで兵隊は八方に手を分け、そこへと探しまはつたけれども、どうしても見つからないで、歸つて其の旨を報告に及ぶと、ガリバルヂーは如何にも物足りないやうな様子で、之を聞いて居つた。其の翌朝になつて、いつも目ざといガリバルヂーが、平生にない朝寢をするので、部下の將校が怪しみつゝ、しばらく待つて居たが、餘りおそくなるので、そつと其の天幕をのぞいて見ると、ガリバルヂーは大層疲勞したものと見え、前後不覺に寢て居



つて、寢臺の下には、泥だらけの靴や、ズボンを脱ぎすてゝある間に、一匹の羊が寝て居つた。此は前夜兵隊が羊を探しそこなうて歸つた後、ガリバルヂーが自分で之を尋ねに出で、夜半までかゝつて漸く見つけ、つれて歸つたのだといふことが、後に至つて知れたのである。

モーセはイスラエル人民を奴隸の軛から救ふと同じ心で、一匹の迷へる羊を救ひ、ガリバルヂーは伊太利國民を塗炭の苦から助けると同じ心で、一匹の失せたる羊を尋ねたのである。それと同じやうに、耶穌基督は又世界人類を憐れみ給ふ大御心から、頼邊なき、迷へる羊にも似た私共一人一人を救ひ、之を幸福に善良に生活するものとならしめんとて、御苦勞のあまり、十字架にかゝつて迄も死に給うたのである。それ故私共は「善き牧者」なる基督に頼つて、罪の滅亡を免れ、而して永遠の生命を嗣がねばならぬ。

### 九 錠 と 錠

ロンドン 倫敦の聖パウロ寺院に、監獄改良の恩人ジョン・ハワードの肖像があり、其の手には錠を持ち、其の足元には錠が落ちて居る。これはハワードが囚人の錠を解いて自由を與へ、又彼等の爲に、新らしき運命の門戸を開いてやつたことを現すものとして、至つて面白い趣向である。しかし乍ら復考へて見れば、救主耶穌基督は、丁度それとよく似たやうなことを、私共の爲にして居つて下さるのではあるまいか。

基督は私共の爲に罪の錠を打碎いて、眞の自由を與へ給ふものである。其の御言に「凡て罪を犯す者は罪の奴隸なり」とあり。私共は惡の錠にながれ、罪の奴隸となつて、いつも不安な、鬱陶しい生活を續けつゝ、刻々滅亡に近づいて居るものである。スポルジョンの譬話に、或る惡王が一人の鍛冶屋に錠を造るこ



とを命じた。鍛冶屋は仰せの如く鏈を造つて持つて行くと、「まだ短い、もつと長くしろ」と言はれ、長くして持つて行くと、「もつと長くしろ」と命せられ、何遍となく同じ様なことをくり返した末、終に恐ろしく長い鏈を調達し、上納に及ぶと、王は其の鏈で鍛冶屋を縛つて牢屋に投じ、やがて之を死刑に處した。悪魔が人に罪を犯させては、復重ねて罪を犯させ、そんなことをくり返させた後、之を永遠の滅亡に至らしむる有様が、亦之と似て居ると、かやうに云うてある。

そんな風に、人は皆惡の鏈につながれ、罪の奴隸となつて、滅亡に急ぎつゝあるものである。けれども耶蘇基督は私共の爲に其の鏈をたちきり、眞の自由を與へ給ふ。私共は基督を信仰することによつて、罪から救はれ、一切の罪惡に打勝つ力を授けらるゝ。「子、若し汝等に自由を得させば、汝等實に自由とならん」又「基督は自由を得させん爲に、我等を釋き放ち給へり。されば堅く立ちて再び奴隸のくびきにつながるな」とあるのは、それである。新島襄氏が、日本で最

初の衆議院議長となつた中島信行氏にむかひ、「あなたがたは自由自由と言はれるけれ共、自分が肉慾の奴隸となり、罪惡の捕虜となつて居たのでは、幾ら政治上の自由のみ云々されても、役に立ちますまい」と言はれると、中島氏は大に感動し、それから聖書を読み、やがて眞の信仰に入られたといふ話を、聞いたことがある。

基督は斯く私共の爲に、罪の鏈をたち切るのみならず、亦私共の爲に、明るく、樂しき、新しき生活に入るの門戸を開き給ふ。基督は曾て自分の事を語りて、「我は門なり」と言はれた。彼の手には、私共の爲に新しき生活の門戸を開く鍵があるのみならず、實は彼自身が門であり給ふとの仰せである。基督は門である。それ故彼を信仰する者は、其の門をくぐつて、これまで夢想だもしなかつた、樂しく、喜ばしく、新しき信仰生活に、足をふみ込むことが出来るのである。基督の門をくぐつて、私共の入り込むことの出来る、新しい生活といふのは、



言ふ迄もなく善良なる生活である。以前の罪や穢と縁を切つて、専ら神の御意にかなふ、清く美しき世渡をすることである。したがつて、これはどこ迄も幸福なる生活である。神の祝福が断えず其の上にある故、假令物質上には豊でない場合にも、心の中はのんびりと、楽しんで毎日を通すことが出来る。これは又有用なる生活である。即ち一日生きれば一日だけ、何か神様の御用を勤め、世の人に益あることをしないでは、過ぎない生活である。これは又永遠の生命を繼ぐべき生活である。この世ながら神様と偕なる毎日を通すものが、あの世で引續き、神様と偕に住まない筈があらうか。ミランの大伽藍には三つの門があり、其の一つには、アーチの上に、美しい薔薇の花をゑがき、「歡樂は一時のことなり」と記してあり、今一つには、同じくアーチの上に十字架をゑがき、「苦勞は一時のことなり」と刻んであり、真中の大な門には又「最も大切なるは、永遠の事なり」と彫りつけてある。しかも私共をして其の大切な永遠の生命を繼がしむる者は、ひとへに耶蘇

基督の救の恵によるのである。基督は罪人の錠の打碎いて之に自由を與ふるばかりか、亦其の眼の前に善良、幸福、有用なる、永遠の生命の門を開き給ふ御方である。其の御名を讃め奉れ。



一〇 義人は信仰によりて生くべし

マルチン・ルーテルは自分で自分を救ひたいと思ひ、あらゆる修行鍛錬をなし、あらゆる難行苦行を試み、それでも満足が得られないものであるから、胸中無限の煩悶をいだきつゝ、ロマ市に赴くと、そこに昔耶蘇を審いた總督ピラトの役所にあつたといふ、二十五段の大理石の階段を移したのがあり、膝頭でそれを攀ぢ登る者は、一段毎に一年振の罪を赦されるといふのを見出し、正直に傳説通り、膝頭で其の石段を、一段一段、攀ぢ登る折しも、忽ち曾て聖書で讀んだ「義人は信仰によりて生くべし」といふ一句が、電光の如く其の心にひらめき來ることを覺えた。然うだ、人を罪より救ふものは、此うした修行鍛錬でなく、難行苦行でなく、又は儀式禮典でもなくて、信仰である。耶蘇基督を信する信仰のみが、能く人を凡ての罪より救ふのであると、大悟徹底して、階段の中途から奮然として

立ちあがり、以來唯、耶蘇基督を信する信仰によつて、生活するものとなつたといふことである。

基督教は誰も知る如く、どこまでも、實踐躬行を重んずる宗教である。そのため或る人々は、基督教を妙に窮屈で、堅苦しい、並大抵の者にはやり切れない宗教の如く、取違へる例さへ少くない。しかし乍ら、更に立ち入つてしらべて見ると、基督教には實踐躬行よりも先に立つ大事なことがあつて、それは信仰だといふのである。元來人は自分で自分を救ふ力がない。それ故修行鍛錬や、難行苦行や、儀式禮典や、祈禱讀經の如き業で、自分を罪より救はうとする人々の成行は、いつも失敗である、失望である、煩悶苦勞のみである。しかし乍ら人が自分の罪を悔改め、基督と其の十字架とを信じて、天の父なる神様に立歸る時、神様は基督の贖罪に免じて、其の人の過去の罪を赦すのみならず、同時に其の心をも入れかへ、生れかはつた人間とならせ給ふ。人が一旦此うした境涯に達するといふと、

義人は信仰によりて生くべし



以來不思議に、一切の不眞面目なことが嫌になり、凡ての眞面目なことが好きになり、正直、眞實、親切、慈愛の行が、自然に出來て來るやうになる。それであるから基督を信する信仰は、善良なる行の根である、幹である。善良なる行は、基督を信する信仰の花である、實である。所謂「行によらず、信仰によりて救はれる」とは、こゝの事である。そこに世の常の道德と、基督の宗教との相違點がある。道德は人に善をなせ、惡を爲すなと教へるけれども、それを實行する力を與へない。けれども基督を信する信仰は、私共にも、基督を信する信仰によりて、罪それ故自分で自分を救ふ力をもたない私共も、基督を信する信仰によりて、罪より救はれ、清く、義しく、したがつて又幸福で、有用なる生活を營むものとなり得るのである。乃ちルーテルが感奮した、前の「義人は信仰によりて生くべし」といふ御言も、畢竟こゝの道理を教へたものと見て、可いのである。

或時一人の婦人があり、平生力めて慈善喜捨をすることを心がけ、又神に祈つた

り、聖書を読んだり、集會に出たりなどするのではあつたが、どうもまだ罪から救はれたといふ自覺がなく、したがつて胸に満足幸福を感ずることが出來なかつた。ところが或る夜の夢に、自分が恐ろしい絶壁からおちかゝり、手には細い一本の木の枝を捉へ、ぶらさがつて居ると見た。「助けてくれ、助けてくれ」と、大聲をあげて呼ばはつて居ると、下の方から力強い聲で、「其の枝を放せ、其の枝を放せ」といふのが聞えた。けれども枝を手放したら、自分は谷底に落ちて死んでしまふだらうと思ふ故、いよいよ堅く之にとりすがりながら、尙も助を呼求めて居ると、下から響く聲は更に言ふのであつた。「其の枝を放す迄、お前は助からないのだ。それを放して、下に待受けて居給ふ大な御手に身を投げ込むのだ」と、いはるゝと見て、眼がさめた。そこで婦人は、これ全く神様が、自分の小さい慈善喜捨や、祈禱や、讀經や、禮拜や、儀式などに依りすがつて居るのを戒め、單純に基督を信する信仰によりて救はれよと、示し給うたものに相違ないと心付き、其

義人は信仰によりて生くべし



の時からへりくだつて耶蘇の救を呼求め、直ちに罪の赦を得、又新しき心を與へられ、有用にして幸福なる生活に入つたといふ話がある。それ故自分で自分を救ひ得ず、煩悶苦慮して居る人々は、どうか速に此の基督を信する信仰においでなさい。義人は信仰に由りて生くるものだからである。

一一 人生意氣に感ず

後に唐の太宗と呼ばれた世民は、兄の建成から妬まれ、危く命をとられようとして、これではならぬと氣がついた故、先手をうつて其の兄を殺し、自分で天下をとることゝなつた。然るに兄の家來に魏徵といふ者あり、かねがね兄に勸めて、一時も早く其の弟をなき者にするやう、忠告して居つたといふことを聞き、彼を曳出して取調べて見ると、思ふにまさる立派な人物であつた故、之を嚴罰に附する代りに、反つて其の罪を赦し、重く用ゐて、國家の大事に參與せしむるに至つた。そこで魏徵は忝けなさの餘、詩を作つて「人生意氣に感ず、功名誰か復論せん」と、歌うたのである。

今私共が神様を忘れて其の御旨に反き、罪に罪を重ねて居つた時、神様が其の獨子なる基督を降して迄も、私共の罪を贖ひ、私共を赦し、のみならず、



以來新しき心を授けて神の子とならしめ、私共を用ゐて此の世の救の爲に盡させ給ふ御恵が、亦大に之と似た所がある。

(一) 魏徴は其の初、建成に與みして、太宗(世民)をなき者にしようとした。其の如く私共は惡魔に與みして神様に逆ひ、其の御旨に反き、勝手氣儘な罪の世渡をして居つたものである。

(二) 太宗は魏徴を罰しないで、之を赦した。其の如く神様は私共の重ね重ねの罪を罰しないで、反つて基督の十字架の贖によつて私共を赦し、私共を罪より救ひ給うたのである。

(三) 太宗は魏徴を重く用ゐた。其の如く神様は私共のやうなものをさへ、潔め用ゐて、それぞれ其の分に應じ、此の世の救の爲に、御奉公をなさせ給ふのである。

(四) 魏徴は太宗の知遇に感じ、身を抛つて、一生の忠義を誓ふことゝなつた。

私共も亦神様の恵と、基督の愛とに感激し、一生神と人との爲に、忠勤を挺んずべきことを誓はねばならぬ。

昔一人の住職があり、其の若い弟子らが心得違をして、夜な夜な堀をのり越え、外に出ては道樂をするのを見て、甚く心を痛め、何とかして之を悔改に至らしめたいと苦心した。ある夜若い弟子らが、復又箱を積んで踏段をつくり、高堀をのり越えて出るのを見て、其の後から、そつと箱を取りのけ、自分がそこに屈んで、箱の代りに踏段になつて居ると、やがて若い弟子らは歸つて来て、外から高堀をのり越え、箱を踏段に内に入るつもりで、飛びおりて見ると、踏段の箱はなくなつて、其の代りに人間がそこにしやがんで居るのである。びつくりして窺いて見ると、こはいかに、それが師の僧であるから彼等は仰天し、一同、そこへ突つ伏して其の不心得を詫び、以來は放蕩の行を改めたといふ話がある。今神の子基督が罪深き私共を救はん爲に、十字架につき給うたといふのも、それと似て、

人生意氣に感ず



つまり罪人を救はん爲に、罪人にふみにじられ給うたものと言つて可い。「彼は我等の愆の爲に傷つけられ、我等の不義の爲に碎かれ、自ら懲罰を受けて我等に平安を與ふ」とあるのは、その事ではないか。

本間俊平君が、或る囚人の家を訪ねられると、時は夏のやけつくやうに暑い盛りであつたが、囚人の母は裏から出て来ていふには、「何でも刑務所では、夏の暑い時に、狭い部屋の中に閉ぢこめられて、食事も、兩便も、そこで辨ずるのだと聞ききました。今日あたりは、伴がどのやうに、つらい思をして居ることであらうかと、それを思ひやる爲に、先刻から裏のむさくるしい便所に入り、そこに屈んで、伴の身の上を考へて居つた處であります」とのことに、本間君それを聞いて感激に堪へず、直ちに刑務所を訪ねて其の伴に面會し、自分が目に見た彼の母の事を話すと、流石の悪漢も之には全く我を折り、それから以後は悔改めて、見ちがへるやうな善人になつたさうである。それと同じやうに、基督は神様の前に積み重ね

ねた私共の罪を、我が事のやうに一人で引受け、私共に代つて十字架に死に給うたのである。それ故私共は基督の十字架を仰ぎ見て罪を悔改め、其の功德によつて過去の罪を赦さるゝのみならず、心を新にせられて、以來幾分かでも、神と人との爲に、役立つ者として用ゐられるやうでなくてはならぬ。所謂「人生意氣に感ず、功名誰か復論せん」とは、此うした意味で今日の私共に、その儘當儀る言ではないか。



一一 差別あることなし

人は兎角、人と人との間に差別を設けたがるものである。財産の多寡により、學問の有無により、門閥により、地位により、身分により、男女の性により、果は人種や、皮膚の色等によりて、同じ人間の間に種々と、差別を設けたがるものである。しかし乍ら神様は一視同仁の神様である。基督は人間を人間として扱ひ給ふ。或人が「十字架の下と、墓の中とは、一切の人間が平等である」というた如く、基督の十字架の下では、所謂貴賤上下の隔がなくて、凡ての人は皆平等である。何れも同じ人間として、無差別の待遇を受けるのである。

これを聖書の教に照して考へて見るに、第一、神様が人を愛し給ふ上に於ては、人と人との間に何等の差別がない。神様は凡ての人の父にて、人は皆其の子供である。それ故神様は凡ての人間を、我が子として愛し給ふのである。親は出來の悪い子でも、之を見棄てないで、反つてそれだけ餘計に心配もすれば注意もするのである。それと同じ様に、神様は罪ある世の人をも見棄てないで、反つて之を愛し給ふ。即ち「天の父は其の日を惡しき者の上にも、善き者の上にも昇らせ、雨を正しき者にも、正しからざる者にも降らせ給ふ」とあるのは、その事である。

第二、人は神様の前に罪人たる點に於て、何等の差別がない。即ち「義人なし、一人だになし。善をなす者なし、一人だになし」とある如く、人は皆神様の前に罪を犯して居る。爲すべきことは爲さないで、爲すまじきことのみ爲し勝ちである。それ故人は皆神様の前に罪人である。「たふときも、いやしきもたゞ名のみにて、まことは同じ罪人ぞかし。」したがつて人の胸の中には安心がなく、其の爲す所には失敗や、悲嘆や、煩悶や、不満足や、不愉快のみつきまふのである。

第三、そのみならず、人の一生の終には、死が襲ひ來るのである。人間は誰も皆死なねばならぬものだといふ點に於て、私共は全く無差別である。秦の始皇



は不老不死の薬を求めて、徐福といふものを、日本に迄も派遣した。其の徐福は紀州の熊野の邊に留つて、歸らなかつたなどいふ言傳がある。世には不老不死の薬があればと、慕ひ望む人は多くあれども、そんなものは見付らないで、生ある者は、必ず早晚、死なねばならないことに定つて居る。「一たび死ぬること、死にて審判を受くること」は、人に定まれることなり」とあり。人は皆死ぬる者だといふ點に於ては、更に差別がないのである。

第四、然るに神の子基督は、凡ての人を罪より救はん爲に世に來り給うた。基督が私共の救の爲に死に給うたといふ點に於て、亦私共の間には何等の差別がない。「夫れ神は其の獨子を賜ふほどに、世を愛し給へり。凡て彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得ん爲なり」とあるのは、それである。アフリカへ傳道に行つた或る宗教家が、一人の會長に會ひ、其の支配の下にある人民に、説教させてもらひたいと交渉すると、會長はこれに同意したばかりか、若し自分のために

特別の傍聽席を用意するなら、自分も出て聴きたいといふことであつた。「私は會長であるから、人民と一緒になつて聞くわけには行かない。特別の席を設けてもらひたい」といふのが、彼の希望であつた。其の通りの取計らひをして、別席にて會長に話を聞かせておくと、其のうちに宗教家は、人が皆神様の子供であること、それにも拘らず、人は皆同じ様に罪人であるから、悔改めて基督を信じ、其の救を求めなくてはならないことなど、語り出でると。會長はやがて其の別席から轉がり出で、「私は罪人である。人民と同じ罪人であるばかりか、反つて彼等よりも大なる罪人である。人民を苦しめ、多くの人の血を流した私は、一番の大罪人である。どうか私を基督の救に導いて下さい」と、涙ながらに訴へ出でたといふ話がある。それであるから聖書には、「今や律法の外に神の義は顯れたり、これ律法と預言者とに由りて證せられ、耶穌基督を信するによりて、凡て信する者に與へ給ふ神の義なり。之には何等の差別なし」と、教へられて居るのである。



一三 頼山陽とジョン・ニュートン

頼山陽は幕末の一大文豪にて、其の著「日本外史」「日本政記」等は、幕府を倒して王政を復古した維新の改革に、最も大なる感化を及したものだと言はれて居る。然るにそれほど大文豪の頼山陽も、青年時代には脱線して放蕩の行をなし、若き妻はヒステリーに罹つて郷里へ遁げ歸り、自分にも家に居づらくなつて夜ぬけを企て、捕へられて座敷牢に入れられるやうな不始末を演じ、其の兩親に心配をかけたことも、一通りではなかつた。そこで彼も或時は自ら「悔亭」だの「改亭」だのと名乗り、つとめて身の行を改めやうと試みたが、どうも思ふに任せらかつた。

彼が四十五歳になつて後にも尚、酒を過した爲に、其の母は亡き父の書いたものを床の間にかけて、彼が此の後過度の飲酒を慎むやう、誓約を立てさせた如きことがあり。彼が四十六歳の六月、母に贈つた手紙には又、

兎角酒過ぎ候て直に寢候事時々有之、此の癖相止め、神邊先生(茶山)の如く屹度量を相定め、酒後にも夜學出來候様に可仕、追々燈火親しむべく相成候、今日明朝の際、一年の半に御座候、たしか先君子御誕生も今日と奉存候、是を立誓の日と仕り、久しきものに御座候へ共、ウカ／＼不仕、出精不朽の業を成し申度存候。

即ち亡き父の誕生日を立誓の日として、今一度節酒の約束をしたものである。いかに流石の大文豪も、己が身の行の改め難い爲に、苦しんだものかといふことが、察せらるゝではないか。

基督の宗教は、人の心を改めて、身の行を變へしむる所の宗教である。人が自分己が行の改め難いのに苦しみつゝ、それにも拘らず、眞に今日迄の、我が罪深き生活を悔改めて、基督を信仰し、天の父なる神様に立歸るといふと、神様



は其の人のこれ迄の罪を赦すのみならず、亦其の心に聖靈をおくつて、新しき生命を吹き込み給ふのである。其の結果、其の人は新に生れた人間となる。即ちこれ迄もたなかつた靈の力を胸に宿し、不思議と従來持餘した惡の習慣に打ちかち、又従來行ひ得なかつた善事を行ひ得るやうになる。基督が、「人新に生れずば、神の國を見ること能はず。」又「肉によりて生るゝ者は肉なり、靈によりて生るゝ者は靈なり。汝等新に生るべしと、我が汝に言ひしを怪むな。風は己が好む所に吹く、汝其の聲を聞けども、何處より來り何處へ往くを知らず、凡て靈によりて生るゝ者も斯の如し」と、仰せられたのはそれである。

ジョン・ニュートンは英國人であるが、青年時代に船乗となり、奴隷賣買船に乗つて、アフリカの黒人を連れて來ては、英國人に賣つて居つた。こんなにして長い間、随分宜しくない生活を續けたのであるが、一日大暴風にあひ、船員の或者は浪にさらはれて、死んでゆくのを目の前に見つゝ、體を繩で柱に結びつけ、ボ

ンプで水をかへ出し、半日以上も健闘して居る間に、彼は始めて神様に祈る心が起つた。斯て後彼は悔改めて基督を信仰し、新に生れて見ちがくるやうな善人となつたのである。「私はアフリカの荒い獅子であつたが、今は基督に救はれて、柔和な羔となつた。」と、彼が自分で物語つたのは、實際の事實であつた。此のニュートンは後に用ゐられて、多く力ある讚美歌を作つた。其の中には

一 いざやわがたま　　みまへにいのれ  
主はよろこびて　　きよあげたまはん

二 きみのきみなる　　主にしおはせば  
めぐみはつれに　　もとめにあまらん

三 つみのおもにな　　みなときおろし  
こゝろやすけき　　身となしたまへ

四 われなきよめて　　主のものとなし  
みむれのまゝに　　すべさせたまへ



五 たびしゆく身を ながさめまもり  
世をさる日まで きちびきたまへ

六 みむれにかなふ ひと世をおくり  
みたまの死をば とげしめたまへ

といふやうな、世界的に有名なものもある。

幾ら決心しても、誓約を立て、も、身の行の改まらない爲に苦しむ人々は、來つて基督を信仰し、所謂新に生れた人間におなりなさい。こゝに私共を、一切の罪から救うて、見ちがへるやうな、眞面目な世渡をする者とならしむる力がある。基督の宗教は、どんな薄志弱行の人をも、立派に神様の前に、一人前の道徳品性を備へた人間とならしむる所の力である。

### 一四 國母陛下の聖聽に 達したる悔改美談

大正十一年、上野に平和博覽會を開催せられた節、國母陛下には二度迄之に御臨幸遊ばされたのであるが、二度目に社會館を御覽遊ばさるゝ際、圖らずも、そこに出品してあつた救世軍の社會鍋がお目にとまり、種々御下問あらるゝにより、お附の宮内官吏のみならず、御案内申上げて居られた宇佐美東京府知事が、細々と其の御説明を申上げると、大層御満足に思召されたといふことが、當時の新聞に見えた。それから數日の後、私は宇佐美知事に會ひ、いろいろ當時の様子を伺ふと、何んでも陛下には、救世軍が年末貧民の爲に雑煮餅の世話をすといふことは、かねがね御承知になつて居つたが、唯其の餅と鍋との關係に就いて、御不審の點があらせられた故、「あの鍋に入つた金で、餅を調へるのであります



る」といふことを、御説明申上げると、よくおわかりになつて、大層興味を覺えさせられたのであると聞いた。

一二週間を経て宮内省から御沙汰があり、其の頃救世軍で下谷區仲徒町に改築した貧民病院へ 國母陛下より御名代を御遣し下さるといふことであつた。私共は此の忝けない思召に感激し、それぞれ用意して待つて居ると、其の日の定刻に皇后大夫大森子爵が御來駕になつた。あまり大な病院でもないから、三十分もあれば、一通り見ていただくことが出来るのであれど、皇后大夫には二時間ばかりも御留りになり、種々御尋のあるまゝに、謹んで救世軍の各方面の事業、運動等のことを、なにくれとなく、御話申上げた。又かねがね二冊の寫眞帖を作り、一部は畏多いことながら 陛下に御献上申上げ度、一部は皇后大夫に御持歸を願ひたいつもりであつた故、私は其の寫眞帖にもとづいて、順ぐり事業上のお話を申上げたのである。

其の内例の社會鋼の寫眞が出て來たから、私は皇后大夫に申上げた。「此の鋼なり、又それに關係した餅の事は、先日殊に 陛下の御注意を引き奉つたと拜承して居りますから、ここは少し念を入れて御説明申上げます」というて、それから私は、左の物語をお聞かせ申上げたのである。

今から十餘年前、或年の暮救世軍人の一隊が、雜煮餅を深川區猿江裏の貧民窟に配りにゆくと、一人の男がそれを貰ひ、籠の中から餅を引張出すと、一緒に蜜柑がころげ出た。手拭が出た。齒磨が出た。楊子が出た。最後に小さい印刷物にて、「この後若し、何か思案に餘るやうなこともあつたなら、物はためし、一遍近所の救世軍へ相談に來て御覽なさい。」といふ意味のことを書いたのが、出て參つた。「これは面白い、頼まないのに氣がついて、餅の心配をしてくれる位だから、頼みに行つたら屹度酒代位貸してくれるかも知れない」と、彼は救世軍の深川小隊へ酒代を借りに出かけたのである。「以ての外の話だ、そんな了簡だ



から、あなたは自分で種々なる禍を身に招いて居るのである」というて、受持士官は正面から異見した上に、「平民之福音」といふ本を一冊くれた。「人が折角頭を下げて頼むに、一文も貸さないで、理窟ばかり言ひ、書物なんか呉れたつて、何の役に立つ。しかし可なり厚味のある本だ。屑屋にうつたら、一錢五厘位になるかも知れない。まあ辛抱して持つて歸つてやらう。がそれにしても、この年越をどうする。浮かりすると空腹い目をしなきやなるまい。エ、儘よ、今晚あたり思ひ切つて、一つ、大仕事でもしてやらうか」と考へた。大仕事といふのは泥棒することであつた。それにしてもまだ時間が早いから、一遍家に歸つたが、さて妻や子の顔を見ると、憫れなものである。「俺が若し今晚にもやりそこなつたら、こいつらは少く共二三年、お爺の顔が見られないというて泣くだらう。せめて一二時間でも嬉しがらせてやつた方が、罪が軽からう」と。今貰うて來た書物を妻の鼻の先に突きつけて、「これ御覽、救世軍に行つてこんな本を

貰うた。之を讀んで俺はこれから、眞面目な人間になるんだぞ」といふと。其の妻は「なんでお前さんに、そんな氣の利いた事が出来るのですか」と答へる。「何、俺も男だ、之を讀んで今から善人になるんだ」と。つい行懸り上、「此の書物を讀んでく」と言ひ出したから、否應なしに、讀むやうな眞似でもせねばならない破目に陥つたのである。そこで彼は何のかんがへもなく、「平民之福音」を、十數頁讀んでゆくうち、忽ち一つの例話にぶつかつた。近所の島に入つて、野菜物を盗む男があり、其の子供に見張をさせておくと、子供は忽ち、「おとつさん、見て居るよ」といふ。驚いて飛び出し、「どこに、誰か」というたら、「天に神様が見てござる」というたと。此ういふ處まで讀んで、其の男は書物をそこへ投げ出した。「天に神様なんか見て居つては、今晚大仕事は出来ないではないか」と。とんだものを讀んだことを悔むだけでも、今更致方もなかつた。「えい、まゝよ、こんなことなら、いつそ今一邊、救世軍に出直して行つ



て、本氣でさつきの話を、もし聞いてやれ」と、彼は急に心機一轉して、救世軍に出かけ、指導をうけて、それから信仰の道に志すことゝなつたのである。

十年の後彼が私に物語るには、「いやもう、あの時のざまつたら、全くお話になりませんでした。年の暮の寒い最中、うちには襦袢が一枚しかないから、私が着て出れば、家内が着ないで引込んで居る。家内が着て出れば、私が着ないで引込んで居るといふ有様。救世軍に行つて見ると、制服だとかいうて、男の人達は、洋服の襟にSを付けて着て居るから、私もこしらへるなら制服にしよう」と、無理な算段をして一圓五十錢を投じ、安物の舊洋服を買ひ、襟にSをつけて着て出かけた。それさへ終日其の洋服をねかして置く力はないから、朝質屋に持つて行くと、五十錢貸してくれる。それで鐵槌をうけ出して、一日稼いで、夕方今一度質屋に行くと、今度は鐵槌を質草に三十五錢貸してくれる。それに

十七錢五厘をそへ、五十錢に對する日歩二錢五厘といふ高利を拂うて、制服をうけ出し。かくて洋服と鐵槌と入れたり、出したりして稼ぐうち、段々新しい運命を開拓したのであります」と。

彼は飾屋の職を有して居り、稼ぎさへすれば、立派に一人前以上の儲けはあるのであつた。今では所得税を拂ひ、國税を納め、朝鮮で警部をして居つた兄の遺族をも引取り、その子供等をも我が子と一緒に學校に通はせ、うちには、二人の仕事の弟子も居つて、相當にくららしてゐるばかりか、又救世軍人として盛んに小隊に盡し、近所の某警察署長の如き、心得違つた人間に説諭をした後では、往々にして、「歸りに何軒目の、何某さんの處に寄つて、少しお話を伺うて歸つたが可からう」というて、差向けらるゝほどになつて居るのである。

私が段々話してこゝ迄來ると、皇后大夫は小膝をうつて、「それは近頃の美談だ。其の男はどこに居る、何といふものですか」とお尋があり。彼の住所姓名等を書



いて差出すと、皇后大夫には、「これら凡ての事を、詳かに、陛下に奏上致しまする」といって、立去られたのである。

果して然らば、この貧民窟に零落して居つた不心得者が、悔改めて基督を信じた爲に、今は見違へるやうな良民となり、又眞面目な救世軍人として働いて居る物語は、恐らく皇后大夫の御口から、畏多くも、國母陛下のお耳に迄も達したのであらうかと、恐察し奉るのである。どういふ勿體ないことであらう。

此の如く基督を信ずる信仰は、如何なる罪人をも救うて、之を新しき人に造りかへるのである。基督には救ふべからざる民がないからである。ハレルヤ。

一五 美

貌

ヨセフは「貌うるはしく、顔うつくしき」青年であつた爲に、主人の妻から幾度か道ならぬことを言ひ寄せられたが、彼は神様を敬うて、立派に良らぬ異性の誘惑を却け、「我いかで、此の大なる悪をなして、神に罪を犯すべけんや」と、言うたのである。之に反してアブサロムは、「足のうらより頭のいただき迄瑕のない」美貌の持主であつたが、父ダビテ王に反きて親不孝の罪を犯し、その身を亡したばかりか、その國家に大なる禍を及ぼした。それ故顔や貌の美しいのも結構だが、それよりも優つて最も大切なるは、靈魂のうつくしかるべきことである。又其の人格のうるはしかるべきことである。

此の道理は、單に男子に當ゆるのみならず、同じやうに亦、婦人にも當ゆるのは申上ぐる迄もない。蘇格蘭のメリー女皇は、其の時代の記者、又歴史家から、



「凡そ人間の姿をとつた者の中に、これほどの美人は曾てなかつた」と迄、賞揚せられた人にて、自分でも亦其の美貌を誇つて、随分目に餘る行が多かつた。そこで宗教改革者ジョン・ノックスは彼女を戒め、「此は何といふ人生であらう、驕奢なる貴婦人よ、いつ迄こんなことが續くと思ひますか」というたが、案の錠、彼女はそれから數年の後、斷頭臺に登つて、首を刎ねられねばならぬやうな事になつた。

ハミルトン夫人は又、其の顔貌が美しいばかりか、音楽や繪畫にも素人ばなれにした腕前があり、其の物言ひから、動作に至る迄、悉く人を引つける力があつた。その爲に有名なる海軍提督ネルソンも、彼女に關係して、妙な浮名を立てられたことがある。ハミルトン夫人といへば、其の當時、世の最も名譽ある幸福な婦人と見えたが、しかし然うした状態は長く續かなかつた。それから數年の後、或る婦人が佛蘭西のカイラスにて、牛肉屋へ、狗に食べさせる爲の粗肉を買ひに行

くと、其の家の主婦が、「あなたは狗に迄、親切なお方とお見受け申しますが、出来ることなら、うちの二階に居る落魄した一英國婦人に、其の肉の一小部分を施してやつてくれませんか」といふ。そこでお客は牛肉屋の二階の、薄暗い一室に上つて見ると、そこに寢て居るのは、一時美貌と驕奢とを以て世に謳はれた、ハミルトン夫人の、成の果であつた。而して彼女の死んだ時、あとに残つて居つたものは、唯數枚の質屋の書付ばかりであつたと、いはれて居る。

有名な政治家ピットの姪に、スタンポープといふ貴婦人があり、美人の譽が頗る高く、世の王公貴人も、どうかして彼女の機嫌をとり、彼女から一顧を得ようと、之に媚び諂らう状態であつたが、數年の後、容色が少く衰へ出すと、忽ち誰一人、之を見かへるものさへなくなつた。彼女は病衰の身を嘆いて言うたのである。私の腕は曾て肥えふとつた爲に、之を抓ねることが出来ないと言はれたものだが、今は瘦せて骨と皮ばかりである。私の齒は悉く脱け落ちて、私の顔には長



い皺しわがあらはれ出した。此この窶やつれた貧苦ひんくの身みを、いかにしたら可よいのであらうと。

我わが日本ニホンでも「そとば小町こまち」などいうて、一時じは日本ニホン一の美人びじんと謳うたはれた小野小町オノコノコが、老おいて後のちには零落れいらくに零落れいらくを重ねかさね、終つひに乞食こじきになつたと、傳つたへられて居をる。それ故ゆゑ使徒しとペテロは其その時代じだいの婦人ふじんたちをいましめて言うた。「汝等なんぢらは髪かみをくみ、金をかけ、衣ころもを装よそほふ如ごとき表面うはへのものを飾かざりとせず、心こゝろの中の隠かくれたる人ひと、即すなはち柔和にじやわ、しづかなる靈れいの、朽くちぬ物を飾かざりとすべし。是これこそは神かみの前まへにて價貴あたいたふときものなれしと。私共わたくしどもは衣服調度いふくてうどを以もつて身を飾かざる以上いじやうに、心こゝろと人格じんかくとを以もつて、美うつくしく飾かざる考かんがへがなくてはならぬ。

然しからば私共わたくしどもは、どうして其その心こゝろと人格じんかくとを美うつくしく飾かざり得うべきかといふに、それは基督キリストを信しんじて罪つみから救すくはれ、以い來らい唯ただ神様かみさまの御旨みむねにかなふことのみ考かんがへ、語かたり、又また行おこなふものとなるの他ほかはない。聖書せいしょに、「汝等なんぢら耶穌基督キリストを衣きるべし」とあり。基督キリストの

心こゝろを以もつて心こゝろとする人物じんぶつには、神々かみしき基督キリストに似にたる人格じんかくが、自おのづからに備そなはつて來くるものである。ステパノの顔かほが、天てんの使つかひの如ごとく輝かがやいたなどといふものも、全まったく基督キリストに在ある者ものの人格じんかくの如ごとくやきを言うたものと見て、間違まちがひないのである。



一六 金

錢

基督の御言に「世の心づかひと財のまどひ」(マタ一三二二)といふことがある。「世の心づかひ」といふのは生活難である。金錢が自由にならない爲の苦痛である。「財のまどひ」といふのは、もつた金錢の扱ひ方に惑ふことである。金錢を手に握つた爲のわづらひである。世の人は年中、此の二つの中、何れか一つの悩みを経験して居るのである。然らば基督教は此の點に就いて、如何なる解決を私共に與へるであらうか。

基督教は「世の心づかひ」に苦しむ者に、新しき力と望とを與へる。基督を信ずる者は其の靈魂が救はれ、罪から解放たれて、懶惰者は稼人となり、むだ費をした者は儉約をするやうになる。然るに勤と儉とは、私共を生活難から免れしむる力である。少く共家業を勉強して、堅氣に身を修むる者には、滅多に食ひはぐれはないものと見て、可いのである。フランクリンの言に、「富に至る途は、市場に行く途と同じやうに、明白である。それは勉強と儉約との二語に歸着する。つまり時間と金とを濫費しないで、反つて其の最善の用をなすことである。勉強と儉約とがなければ、何も出来ない。けれ共此の二つのものがあれば、何でも出来る」とあり。ウエイランドといふ人の言には又、「富は多く人々の思ふやうに、巧みな投機とか、上手な企業とかによるよりも、寧ろ勉強と、儉約と、經濟とによりて得られる。此の途から行く者には、滅多に窮乏に陥る恐がない。けれ共其の他の途から行く者には、概して破産が附纏ふのである」と、いうてある。しかも基督を信じて、罪から救はれた者は、其の家業を神様から授けられた務として勉強し、虚言をつかず、誤魔化さず、酒をのまず、道樂をせず、虚榮や贅澤の爲に餘計な金を費はないから、どうしても前よりは、生活が樂になるべき筈である。或は基督を信じて後、尙以前と同じ貧乏な生活を營むことがあつても、其の人の心の



中には眞の安心があるから、前ほど貧乏を苦しめない。案外氣樂に毎日を過すことが出来るやうになる。基督の宗教は、人を「世の心づかひ」から救ふ所の宗教である。

基督の宗教は又人を「財のまどひ」から救ふ所の宗教である。私共は兎角いつでも金がない爲に苦しむのではあれど、偶々金が入ると又、そのつかひみちを誤つて、とんだ罪惡と悲惨に至ることが多いものである。マシユー・ヘンリーの言に、「富は之を得る爲の苦心があり、之を保存する爲の心づかひがあり、之を用ゆるに就いての誘惑があり、之を濫費した爲の祟があり、之を失うた爲の悲哀があり、最後に其の總勘定を神様の前になすべき責任の重荷がある」とあり。然るに世の人は、其の金錢の扱ひ方を誤り、只管之を愛惜して貪慾に陥るのでなくば、之を濫費して其の身を亡ぼすやうな例が、少くない。しかし乍ら基督教は、金を神様からの預り物として、それに對する責任を負ひ、之を有益に用ゐて、世

の爲、人の爲に盡さしむる所の宗教である。基督を信仰する者は、神様を愛し、人を愛する心から、其の手に入つた金を取扱ふものである。

聖書に一人の貧しき寡婦が、日本の金にして僅か五厘ほどを神様に献げ、基督から、「此の婦人は他の巨額の金を納めた者よりもまさつて、多くの献物をしたのである。なぜかというに、他の人々はありあまる中から納めたのだが、此の婦人は不自由な中から、ありつたけの金を献げたからである。」というて、之を賞讃し給うた物語がある。それであるから大切なるは、金高ではなくて、之を献ぐる心根である。私共は神様を愛し、人を愛する心から、たとひ僅かの金でも有益に働かせ、之によつて世を益し、又人を益するやうでありたい。パウハウルの言に「金は善き僕である。けれども危険な主人である」といふことがある。私共は「財のまどひ」に身を誤まらぬやう戒心し、反つて神様の御助により、金を有意義に用ゐてそれぞれ身分相應に、他人に善を行ふやうでなくてはならぬ。



一七 禁酒の實行力

禁酒に困難なるは、其の實行の問題である。一旦酒の癖がついては、之を改めることが困難である。之を改めても永く續かないのが、何よりの困難である。昔話に向ふ三年間、禁酒を約束した男が、どうしても其の約束を守り切れないから、三年といふ期限を六年にして、晝はのまないけれども、夜だけのむことにした。其のうち晝ものまずには居られなくなつて、今度は六年といふ期限を十二年に改め、夜晝共に飲むことにしたといふのがある。

又或る家の伴が酒をのんで仕様がなから、其の親爺が、やかましく異見をする時、伴は大な文字で「明日より禁酒」と書き、それを柱に貼り付けて「お父さん、私の決心は此の通りだから、今日だけは自由に飲まして下さい」といふ。今日一日だけなら、どちらになつても大したことはあるまいと、親爺は之を許し

ておくと、翌日になつても、酒をやめるところか、いよいよ飲んで居る様子であるから、親爺が行つてその約束違反を咎めると、伴は昨日柱に貼り付けた「明日より禁酒」といふ文字を指し、「お父さん、私の決心は此の通りだから、今日だけは、自由にのまして下さい」と、昨日と同じ事をくり返したといふ話がある。これはつまりらぬ話だけれども、世間にはそれと似て、何遍禁酒の決心をしても、それを守り通すことが出来ず、見苦しい失敗をのみくり返して居る人々が、多くある。一體之をどうしたらよいといふのであらうか。

理想的に言ふと、酒が此の世になくなつてしまへば、最早どんな吞兵衛でも、しかたなしに禁酒するであらう。それ故法律を以て、酒を此の世からなくしてしまふのが、一番の上分別である。つまり日本を酒のない國にしてしまへば、最早酒の害にたゝらるゝものは、なくなるわけであるから、どうかつまりは、然うした日を來らす爲に、お互今から盡力したいものである。



しかし乍ら、それが今急に行はれ難いものとすれば、其の次に大事なのは、初から酒をのまないことである。最初から、酒の味をしらないで過せば、もとより酒の害に苦しむこともないわけである。その意味から未成年の禁酒といふは、大層好いことである。けれ共二十歳を越したばかりでは、まだ意志が十分堅固でない。恰も其の品性建設の最中といふ年頃であるから、ついでに之を二十五歳まで延長し、日本國民は凡て二十五歳迄、酒をのまれないことにしたなら、恐らく二十五歳を越して後迄、其の善良なる習慣を、引續き持續くる者も多かるべく、將來の我が同胞が、大變助かるわけであるから、どうか一時も早く、此の二十五歳禁酒法案を通過して、實行に至らせたものである。

それにしても、現在既に酒をのみ覚え、酒の癖がついて、之を改めることが出來ない爲に困つて居る者は、どうしたら可いのであらうか。それに就いて一番間違のない、確實なる禁酒の方法は、宗教上の信念を土臺に禁酒することである。

眞の神様を信する信仰の中に、禁酒の實行力を見出すことである。

第一、之を基督教の信念から觀れば、酒をのむのは悪い事である。神様の前に罪である。それだから禁酒しろといふことになる。世間では兎角、酒をのむのは損であるから、禁酒しろとだけ教へる。即ち酒を飲むと健康を害する、つまらぬことだから禁酒しろとか。又は酒をのむと無駄な費用がある、引合はない話だから禁酒しろとか、忠告する。しかしさういふ動機から思ひ立つた禁酒は、やがて酒をのんでも、餘り健康にさわらぬ程度にのんだら可からうとか、又は自分の金でのもまない時は差支あるまいとかいふやうな、切ない申譯で、直に破れてしまう愚がある。けれ共酒をのむことは悪い事である。神様の前に罪惡であるといふことになると、さうたやすく、好い位の申譯を構へることが出來ないから、大層力強い禁酒の動機ともなり、大に其の實行上に便宜を得らるゝわけである。酒をのむことは損だと考へて居る間は、まだ其の動機が弱く、實行力が乏しい。しかし



乍ら酒をのむことは罪惡だ、人の道に外れた事だ、神様の御旨に逆らふことだと心付くやうになつて、始めて最も有力なる禁酒の動機を見出すわけである。

第二、今一つ、基督教の信念は、人の心を入れかへ、酒飲を酒嫌にする力であるから、此の信念にもとづいて禁酒すれば、どんな酒癖の悪い人でも、立派に酒をやめることが出来る。人が自分のこれ迄の行の間違つて居つたことに心づき、悔改めて基督の救を求むる時、神は其の人の心を改め、これ迄とちがうて、凡ての不眞面目な事、又ふしだらな生活が、しんから厭になり、反つて一切の眞面目な事、堅氣なこと、正しいことが、慕はしい人間となる。之はやつて見ない人には、不思議なやうな話だが、やつて見た人には、正確疑のない實際上の事實である。救世軍には、此のやり方によつて、大酒飲が酒嫌となり、ふしだらな呑兵衛の住居が、今では幸福圓滿な家庭と變つて居るやうな實例が、幾らでもあつる。もとより此の宗教上の信念は、何も唯酒をやめる爲の方便としてののみ、役に立つのではない。反つて此の信仰は、酒は愚か、私共を其の他の一切の罪から救うて、神様の前に清く、正しき、一人前の人間たらしむる道である。したがつて此は又、萬人が萬人、即ち酒飲も禁酒家も、のこらずふむべき、人間の正道である。しかるに其の萬人の履むべき正道である所の宗教上の信念が、其の副産物の一つとして、亦人を飲酒の惡習から救ひ出すのである。即ち此の信念の中に、どんな呑兵衛をも酒嫌にする力があるといふのは、眞にかたじけなない事といはねばならぬ。

現に此の間も、私は救世軍の或る集會にて、一人の老人が次の如き身の上話をするのを聞いた。「私は三十六年間、呑兵衛で暮し、仕事を怠り、不身持をなし、四人の家族が四ところに散つて、家はつぶれてしまつたのであるが、其のうち妻と子とが先づ信仰に入り、それから仕方のないおちぶれ方をした私迄も救はれて、去る十二年間全く酒のない生活をなし、今一度幸福なる家庭を營むのみか、



伴も禁酒の家庭をつくり、伴の嫁の里まで同じ信仰に入つて、今では三つの家庭が、何れも同じ禁酒と信仰との家庭となつて、毎日喜んで居ります」と。

更に今一人の物語に「私は大根河岸で、吞兵衛の某と仇名をとつたもので、一月に七八十圓宛のんで居つた。それが救世軍に来て信仰に入り、今では吞兵衛といはるる代りに、救世軍といふ仇名で通るほどになつたのは、全く基督に救はれたお蔭であります」と、いふのであつた。

やめにくい酒を、信仰によつてやめることが出来るのみならず、一旦やめた酒を永久に見切つて、いつ迄も禁酒の生活を續けてゆくには、亦どうしても此の信仰によつて、やりぬくに限るのである。大阪の有名な禁酒家で、實業家の江指卯之助君は、十九歳から二十五歳迄、帽子屋に奉公して稼いで居るうち、主人の家がつぶれ、それから細々ながら一本立で商賣をしやうといふ際、是非共禁酒の主義でやりぬかうといふ決心をせられた。それも熱心なる基督教の信仰を背景にして、

やり出されたのであるから、其の以來二十五年、立派に最初の決心を貫かれたのみならず、其の家業の上にも大なる成功をなし、同時に宗教、禁酒等の方面にも、随分多大の貢献をなしつゝ、今日に至られたのだと承知して居る。もとより禁酒は基督教の専有物ではないから、あらゆる宗派、あらゆる宗教を信する人々、乃至は全く宗教宗派に關係なき人々も、皆共に禁酒を實行するばかりか、進んで禁酒の運動にも参加して欲しいのであれど、それにも拘らず、基督教の信念にもとづける禁酒家が、比較的によく其の禁酒を守り、又他人を禁酒に導く上にも熱があるのは、故あること、言はねばならぬ。私はこれ迄何百人、何千人と、數へられない程多數の、随分と酒癖の悪い人々を取扱つた實驗上、無遠慮に申し上げたい。「眞の神様を信する信仰は、此の世の最も確實にして、又永久的なる禁酒の實行力である」と。



一八 行詰りから希望へ

世間は不景氣である。生活は困難である。失業者は増すばかりである。犯罪人は殖える一方である。自殺者は多くなるのみである。此の行きつまつたやうな世の中を、どうして通り越したら可いのであらう。それには、種々なる方面からの解決を要するのは、言ふ迄もないことながら、一つ格別に大切なるは、かゝる場合に、神様に對する明るい信念を以て、さうした境遇事情を切りぬけて行くことである。

昔ヨブはあらゆる財産を失ひ、子供らをなくした上に、自分には又全身に、いやな腫物を患うたが、それにも拘らず彼は言うた。「エホバ與へ、エホバとり給ふ、エホバの御名は讃むべき哉」と。又言うた、「彼(神)我を殺すとも、我は彼に依頼まん」と。使徒パウロも亦、身に一種の病があり、不愉快な上に、活動を妨げら

るゝことが多いものであるから、之を取去られんことを、三度迄も神様に祈つたが、聽かれなかつた。其の時彼は言うたのである。「基督の力の我を庇はん爲に、寧ろ大に喜びて我が弱きを誇らん、我弱き時に強ければなり」と。こんな風に私共が、神様を頼りに患難試鍊に處する事を知れば、現在の行きつまつたやうな世の中にも、尙光明を望んで進んで行くことが出来る。私共は此うした時代に、尙更神様に對する信念の必要を感じるのである。

汽船が洋中にて大層動揺するので、乗客が恐をなして居る中に、一人の少女が平氣で、あちこちと馳けまはつて居る。そこで或人が其の少女にむかひ、「こんな船が動いても、あなたは恐くないか」と尋ねると。答へて、「だつて、私の父さんが船長ですものを」というた。即ち彼女は、其の父の腕前と人物とを深く信頼する故、どんな大風が吹いても、大浪が立つても、大丈夫だと安心して居つたのである。私共は此の少女が、其の父を信用した以上に、天の父なる神様に信頼

行詰りから希望へ



することにより、どんは逆境をも、安心して、通りぬけることが出来るのである。

同じく暴風の中を航海する一汽船があつて、其の乗客の中に、若い陸軍士官と其の妻とが居つた。あまり船の動揺が劇しいので、若い妻は生きた心地もなく、恐れ惑うて居るのを見て、其の夫は刀を抜いて妻の鼻先に突きつけ、「どうだ、恐くはないか」と尋ねると、妻は「恐くはありません」といふ。夫「どうして」妻「だつて、貴君が持つていらつしやるのですものを。」夫「その通り神様が海をも、風をも、其の御手に支配していらつしやるのだから、恐れないで、お任せして居たら可いではないか」と、かやうにいうて、其の妻を慰めたといふ話がある。

或る實業家が事業に失敗し、財産は人手にわたり、店はたゞんで、家族と共に小な家に引移ると、そこで又病人が出来たり、思はぬ心配事が起つたりして、何とも痛はしい有様であつたが、それにも拘らず、當人は一向力を落さないで、不思議

議と快活に、希望に満ちて居るので、其の友人が怪み、わけを尋ねると、彼は答へて「詩篇の第五十篇の十五節が、世に存在する限り、私は失望しない」というた。詩篇第五十篇の十五節といふのは、「なやみの日に我(神)を呼べ、我汝を援けん、而して汝我を崇むべし」といふのである。つまり私共が患難辛苦の中から神様を呼べば、神様が聴きいれて助け給ふといふ意味の御約束である。しかも然うした御約束を賜うた神様の在す限りは、いかなる逆境に陥つても、私共に失望といふことはない筈である。

使徒パウロの言に又、「我等四方より患難を受くれども窮せず、せん方盡れども希望を失はず、責めらるれども棄てられず、倒さるれども亡びず云々」とあり。此うした根強い、底力のある、希望と光明とに満ちた生活は、唯基督を信じて罪より救はれ、天地の神様を我が父上として、お継り申上ぐる者にのみ、経験せらるゝのである。



一九 幸福に生くる道

ジエームス・ホワイトといふ人があり、左の一文を倫敦のサンデー・エクスプレスといふ新聞に贈つておいて、自殺した。

私は皇族を接待したことあり、公侯伯を呼び棄にして交際したことがある。政界に馳驅したことあり、ヨットを所有したこともある。大仕懸の競馬を催し、大なる劇場をも所有した。新聞に關係したことがある、巨額の財政にたづさはり、曾て種々なる企業の爲に十五億の金を調達したことがある。懸賞で拳闘を演せしめたことあり、慈善事業に少からぬ金を投じたこともある。或時は一日に七百五十萬圓をもうけたことがある、人から尊敬を受けて、ジンミー・ホワイトの名は世間の通り物となつた。之によつて見ても、私は人生の如何なるものかを語る資格があると思ふ。私は空腹い目をするとは、どんなもの

かを知り、又ほしい物は何でも手に入つた上、幾千人が私の手から養はるゝやうな經驗をした。私は一度の競馬に賭をして、百萬圓をもうけたこともあつた。或時はマンチエスター迄、特別列車を出させたこともあるが、それかと思ふと、汽車賃がないばかりに、倫敦からロツチエスター迄、徒歩したやうなこともあつた。私は私の出方一つで、身の浮き沈みの定まる多くの人々を有した。私は金のある間は、あらゆる懇懃を盡した人々が、銀行の預金がなくならず共に、見向きもなくなつたのを知つてゐる。私は今生の終に顧みて、一生の出来事が、走馬燈の如く、目の前に展開し來ることを覺える。而して私は今斷言する。人生は唯人々の貪慾と、劣情と、權力とをつきませた、大釜の如きものに過ぎない。

ジエームス・ホワイトは、此うした遺言狀を新聞社に贈つておいて、自殺したのであつた。彼は人生の成功とは何かを知り、交際社會に持てはやさるゝとは、



どんなものかを解し、金も儲ければ、名譽も得て、したい放題をし盡したあとに、  
 「人生は唯人々の貪慾と、劣情と、権力とをつきませた、大釜の如きものに過ぎ  
 ない」と観じ、こんな所に長く生きて居つても仕方がないとあきらめて、自殺を  
 遂げたのであつた。

熟々考へて見るに、彼は此の世のあらゆる物をもつたけれども、今一つ大切な  
 救を有つて居なかつた。即ち罪から救はれて、良心に満足のある、清き生活を營  
 むことを知らなかつた處に、彼の一切の不愉快と、物足りなさとは、原因したも  
 の言はねばならない。幾ら外部に巨萬の富をつみ、したい放題の贅澤をして  
 も、内部に良心の慰安を有たない限り、眞に幸福なる生活の營めやう筈はないか  
 らである。

其の次に彼は大仕懸の事業を營んだか知らねど、其の奥に何等高尚な理想を有  
 たなかつたらしい。人は神様の御旨を行ひ、其の時代の人々に奉仕し、幾分でも  
 此の世を善くしておいて、去るやうでなくては、到底本當の満足は得られない。  
 けれ共若し私共のやうな者でも、一日生きれば一日だけ、幾らか此の世に、善事  
 を行はせていたゞくのたといふことになれば、假令左程大な事業など營む力はな  
 くとも、尙その胸の中に、言ひ知れない喜が宿るのである。

今一つ、彼は世の王公貴人と交際したであらうが、神様と交ることを知らな  
 かつた。神様を知り、神様に祈り、神様に仕へ、まさかの時には神様の御助を求  
 め、どんな困難危険をもくぐりぬけて行くやうであれば、此の世は幸福に渡るこ  
 とが出来来る。而して人生は眞に生き甲斐あるものとなるのである。即ち使徒パウ  
 ロが、「我は賤しきに居る道を知り、富に居る道を知る。又飽くことにも、飢るこ  
 とにも、富むことにも、乏しき事にも、一切の秘訣を得たり。我を強くし給ふ者  
 によりて、凡ての事をなし得るなり」というたのは、その道理を説いたもので  
 ある。人生は短い。浮つかり過して居るうちに、とり返しつかないことになる



恐がある。その人生を最も有意義に、又幸福に渡りたいと願ふ人は、速に基督の救を求め、神様と偕に毎日を過す、眞の信仰生活に入らねばならぬ。

二〇 自殺すべからず

明治四十三年の頃、神戸市外三宮驛を去ること遠からぬ邊に、救世軍に屬する一族があり、毎年其の前の鐵道線路で、轢死を遂げるものが幾人かあるのを見て、其の家の主婦から、何か好い分別はあるまいかと相談があり。試みに紅く塗つた廣告板に、白い大文字で「一寸待て」と書き、其の脇に「思ひ餘つて身の處置に苦しむ人は、此の上の某方か又は神戸市多聞通の救世軍へ相談にお出なさい」と書いて出したら、どんなものであらうと、忠告しておく。早速其の通りをやつて見た甲斐があり、爾來少く共其の場所では、自殺がなくなつたのみならず、其の廣告を見て自殺を思ひ止まり、神戸の救世軍をたづねて来て、身のふり方を相談し、悔改めて基督を信仰するやうになつた者も、幾人かあつた。これが後に各地に出來た「一寸待て」の廣告の、元祖であつたのも、面白い思ひ出である。

自殺すべからず



元來人が此の世に生れ出でたのは、神様の深い恩恵と思召によるものにて、私共は此の世に在る限り、必ず皆、それぞれ神の前に爲すべき務を有するものであるから、どんなことがあつても、勝手に自殺して其の壽命を縮める如きことがあつてはならぬ。「殺す勿れ」といふ御戒は、人を殺してならないことを教へるのみならず、亦自分を殺してならないことを、説き示されたものと思はねばならぬ。それとも若し何か心得違をして、悔恨に堪へないといふなら、之を悔改めて基督を信仰し、新しき生活に入つて、及ぶだけ、過去の失敗を取返すべきである。又は何か身に餘る心配があつて、やれ切れないといふなら、天地の造主なる神様にすがり、一切を其の御手に任せて、心を安んずべきである。不治の難病に罹つたかといふても、精一杯の手當をしながら、一日生きれば一日だけ、神様の御旨を行はんことを、心がくるの外はない。生活難に苦しめばとて、天道は人を殺さない故、短慮を起さないで、出来るだけの骨折をしながら、其の方法を求むれば、必

す何とか、生きてゆくだけの道は開けるに相違ない。何れにしても、自殺を思ひ立つほどの人々は、皆それぞれ自分としては、生きて居られない事情があつて、然うなつたのであらうが、それにしても大切なるは、斯る場合に、第一、自殺は神様の前に罪惡であると心付く事である。第二、事ここゝに至つたのは、自分の心得違ではないかと、自ら省みて、過去の罪と過とを悔改むる事である。第三、既に罪を悔改めたなら、進んで基督の救を受け、これ迄のやりそこなひを及ぶだけ、償ふ分別をすることである。第四、一切の思ひ煩ひを神様の御手に任せ、大船に乗つた氣になつて安心する事である。而して第五には又、死んだつもりで奮闘し、新しき運命を開拓すべき事である。人は自殺せずとも可い筈のものである。神様は人間が自殺しないでも濟むやうに、必ず其の道を開き給ふであらう。唯大切なるは自分達が、其の我儘や心得違を悔改めて、以來神様の御旨に適ふやうな、清く正しき世渡をする覺悟を、定むべきことのみ



である。

久しい以前、或人が放蕩に身を持崩し、行詰つた結果、相手の婦人と心中する相談をなし、モルヒネを買ひに出たが、中々手に入らないので本郷三丁目の邊をうろつくうち、救世軍の大行軍に出あひ、つひ釣り込まれて、春木町の中央會堂に於ける、其の特別集會に出席した。そこには數百人の救世軍人が、手を拍ちながら歌をうたうて、喜び樂んで居り、其のくせ誰一人、酒の元氣で浮かれて居る者も見出さない。これは不思議、自分はこれ迄、面白い事というたら、酒をのみ、浮いた喜びをすることだとのみ考へ、専らそれをやつて來た結果が、今は心中を企つるほどに行詰つたのであるが、此の世に若し、酒一杯のまないで、こんなに喜ばしい世渡をする人々があるものとすれば、一つ考へ直さねばならない」と、其の人は大に發明する所あり。會堂を出るや否や、三丁目の角の自働電話で、相手の婦人に其の旨を申傳へ、それから今一遍、生活のやり直をした。後に其の人が

それら一切の始末を書いた身の上話を、數十回に亘りて、某新聞に掲げ、後それをまとめて、一冊の書物として出版したので、私共も然うした事情を承知するに至つたのである。

それであるから、人は皆如何ほど難儀な事情があつたかというて、之が爲に自殺してはならぬ。又實際自殺などする必要はないのである。神様を信じて、眞直な世渡をして御覽なさい。そこに大な希望があり、又力の出所がある。神様を信仰する者には、行詰りといふことがないものである。



## 二二 明るい生活

いづぞや石川縣を旅行した際、氣付いたのは、其の當局者が熱心に住宅改良を試みて居る事であつた。元來石川縣には昔からの言傳があつて、「明るい家には金がたまらない」といひ、佛間兼客間は明るく造つても、肝心の居間、寢室、臺所は極めて薄暗く、光線も通らねば、空氣の流通も宜しくないやうに出來て居る。そのためでもあらう、同縣は死亡率が日本で一、二と云はるゝ程高く、殊に乳兒の死亡率が甚だ高い。そこで縣の當局者は何とかして、此の薄暗い家々を明るくし、もつと空氣も通へば、光線もとほるやうに、一般の民家を改造させたいと、銳意努力して居る所であつた。

此は至つて面白い事である。日光の通らない家は濕めつばい、塵埃が溜り易い、陰氣である。種々なる病毒が発生し易い。自然そこに住む人々の生命に迄も、影響しやうといふものである。ところが同じ道理は又私共の精神上の生活にも、その儘當儀まるやうに考へられる。私共はその精神上に、明るい生活をせねばならぬ。基督教の有難味は、私共をして、明るい世渡をなさしむる處にあるといつても、過言ではあるまいと思ふ。

第一、神様のない生活は薄暗いものである。神様の旨は如何と問ふ事をしないで、たゞ世間の思惑はどうであらう位の標準で、世渡をする人々の胸の中は暗い。陰氣である。何となくさえずえしない。又まさかの時によりたのむべきお方がないのだから、心細く、たよらないのである。さり乍ら基督に救はれて、天の父の御旨をかしこみ、又何でも神様に御相談申上げつゝ、世渡をする者の心は明るい。いつもはればれした氣持で、困難試練の中をさへも、突破して進むことが出来る。「神は光にして少しの暗き所なし」と、聖書にあるのは其の意味ではないか。

第二、罪の生活は暗いものである。我が本心の命する所に反き、神様の御意に逆



らふ世渡をする人々の心は、暗闇に閉さるゝものである。どちら向いても、たゞ不愉快と不満足とのみ、取巻いて居ることを覺えらるゝものである。所謂「暗に坐する民」とは、さういふ人々のことである。けれども人が悔改めて基督の救を受けると、其の心が明るくなる。それこそ俯仰天地に愧ぢぬ、明るい生活を営むやうになる。それ故「我は世の光なり、我に従ふ者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし」と、基督は仰せられたのである。

第三、身勝手な生活は又、薄暗いものである。しかし乍ら神様と人とを愛する愛の生活には、明るい輝きがある。何を考へるにも自己中心で、自分一人の都合の好いことのみ求むる人は、その顔に迄、もやがかゝつて居る。其の心にいつも不平が宿るのである。けれども他人を愛して、その爲に盡す人の心には、喜と、たのしみとがある。眞の喜とたのしみとは、唯愛の生活を営む人々にのみ、經驗せらるるものと思つて、間違ないのである。或る王子が、いつも氣がふさいで、陰

氣で、病氣勝な生活のみ續けて居らるゝ故、國王は之を憂ひ、醫者をよび、藥をのませ、其の他種々手當を施されたが、一向其の甲斐が見えなかつた。そこへ一人の賢人が出て来て、「若し私の忠告を用ゐらるゝなら、王子の病氣は必ず癒えるであらう」といふ故、國王は喜び、必ず其の忠告に従ふべきことを約束せらるゝと。賢人は白紙に唯一句、「毎日誰かに親切を行へ」と書き、「これが私の忠告である。王子はあまり大事にせられ過ぎて、我儘が増長して居られる。あまり身勝手が過ぎて、不平不満の結果、氣もふさげば、健康も衰へたのである。それ故若し王子が、はればれした氣持になり、明るい世渡をせらるゝ様にと願はるゝなら、先づ其の身勝手氣儘を改め、毎日必ず誰かに親切を行はねばならぬ。かくて後、始めて眞に、これ迄とちがうた、幸福な生活をなし得らるゝであらう」と、いうたさうである。此の如く神様を知り、罪より救はれて、愛の生活を営む以外に、此の世に明るい、幸福な世渡の仕方はなきものと思はねばならぬ。



### 一二一 一羽の雀

昔明智光秀は、毎日一羽の雀を殺して、殺伐の精神を養うて居つたが、後終に其の主、織田信長を弑するに至つたと、傳へられて居る。此の如く、小禽に對して無慈悲なくらゐる人は、やがて亦人間に對して、残忍なことをし兼ねないものである。人間の心事又品性は、往々小さい事の間に顯るゝからである。

ギリシヤのアテネでは、其の市民の代表者が、折々青天井の下で會議を開き、種種政治上、社會上の問題を討議して居つたが、或日然うした議事の最中、忽ち鷹に追はれた一羽の雀が遁げ場を失ひ、飛んで來て其處に列席する一議員の懷に投じた。すると議員は懷に手を入れて其の雀を捉へ、石の上に投げつけて之を殺した。それを見て他の議員等が承知せず、「窮鳥懷に投じたのを憐みもしないで、反つて之を殺すやうな無慈悲な人に、アテネの市政を議する資格はない。斯

る議員は宜しく除名せらるべきものである」と言ひ出し、満場之に賛成して、其の人は忽ち議場の外に逐ひ出されたといふ話がある。

大なる愛心を有つた者は小な禽をさへ憫れむ者である。それ故慈悲仁愛の權化として知らるゝアシシのフランシスは、其の到る所、雀までが慕うて來て、肩に、掌に、憩うたといはれて居る。又米國建國の偉人ジョージ・ワシントンは、幼い時、一羽の雀が地に落ちて、蟻にとりつかれて居るのを見出し、拾ひ上げて蟻を拂ひ落し、其の家に携へ歸りて、大事に手當をした後、之を放つてやつた。しかも彼が此うした一羽の雀に忍びなかつた心は、即ち他日其の同胞が壓制に苦しむのを見るに見かね、その自由の爲に、身を擲つて盡したのと同じ慈愛の心であつたといはれて居る。

さういふことを考へ乍ら、基督が天の父の御慈愛を語りて、「二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに汝等の父の許なくば、其の一羽も地に落つることなか



らん。汝等の頭の髪までも皆數へらる。この故に懼るな、汝等は多くの雀よりも優るゝなり。又「五羽の雀は貳錢にて賣るにあらすや、然るに其の一羽だに神の前に忘れらるゝ事なし。汝等の頭の髪までも皆數へらる。懼るな、汝等は多くの雀よりも優るゝなり」など、仰せられたのを思へば、其の意味殊に深長なることを覺えらるゝ。即ち一羽の雀に親切な人が、亦一人の人間に對しても親切である如く、一羽の雀をさへ愛護し給ふ神様は、亦私共取るに足りない小な一人一人の人間をも、愛護し給ふといふのは、眞に忝ない消息ではないか。

チャールス・ウスエレが、或日の夕方、胸におさへ切れない煩悶をいだきつゝ、裏庭に出て椅子に腰をかけながら、頻りに考へ込んで居ると、そこへ忽ち鷹に追はれた一羽の雀が飛んで来て、あわたゞしく彼の懷に遁げ込んだ。之を見て彼は雀を大事に保護し、鷹が遠く去つたのを見届けて後、之を外に出して放ち去らしめた。しかも其の瞬間、彼は思ふた。「私は此の小雀である、悪魔の誘惑は強い

鷹の如く、私に追ひせまれど、私には尙身を遁るべき神様の懷がのこつて居るのである」と。直に其の氣持を歌に詠んだのが、最も有名な讚美歌の一つとして、今では世界各国の人々に愛誦せられて居る。即ち左の如し。

わがたましひを あいするイエスよ

なみはさかまき かぜふきあれて

しづむばかりの このみをまもり

あめのみなとに みちびきたまへ

われにはほかの かくれがあらす

たよるかたなき このたましひを

ゆだねまつれば みいつくしみの

つばさのかけに まもりたまひれ

わがみはまたく けがれにそめど

きみはまことと めぐみにみちて



われの内外を

ことごときよめ

つかれたたまを

なぐさめたまはん

きみはいのちの

みなもとなれば

たえずわきいで

こゝろにあふれ

われをうるほし

かわきをとどめ

とこしへまでも

やすきをたまへ

此の如く神様は頼邊なき小禽にも似た、私共を記憶し、之を愛の懐にひそませ、之を大能の御手に保護して、あらゆる罪惡、誘惑、患難、病苦、困窮、迫害の間に守り、末は安然に、死の河をのり越えて、永遠の御國に落着かせ給ふ御方である。ダビデの詩篇に「我が靈魂はたえいるばかりに、エホバの大庭を慕ひ、わが心、わが身は、活ける神にむかひて呼ばふ。まことや雀はやどりを得、燕は其の雛を入るゝ巢を得たり云々」と歌うたのも、思ひ合されて、いかにも尊き事

である。此の大能至愛の神様にたよりて、せち辛い浮世に、眞の安心満足を見出す人は、幸福なる哉。



一三三 愛の鞭

「わが子よ、主の懲戒を輕んずる勿れ。主に戒めらるゝ時倦む勿れ。そは主其の愛する者を懲しめ、凡て其の受け給ふ子を鞭ち給へばなり」とあり。神様が人を教へ導き給ふ手段は多々ある中にも、取分け患難辛苦を用ひて、人を戒め、勵まし、教へ、諭し給ふ場合が、多くある様に見える。

先年私が、蘇格蘭のエデンバラにて、週末を過した時のことである。目の見えない一日本人が、其の妻に手をひかれながら、私の集會に出席せられたのを見て、此は如何なる人かと訝りつゝ、話をしてみると、此の人は某大學の出身者であるが、卒業すると間もなく病氣に罹り、終には兩眼とも失明の不幸を見るに至つた。折角大學を出て、これから大に爲す所あらうと志す青年が、急に眼がつぶれたのではやり切れない。しばらくの間、彼は非常に煩悶したのであるが、煩

悶の結果基督を發見した。つまり彼は肉の眼が見えなくなつて、反つて靈の眼が開けたものである。「よし神様の御助によつて、殘る生涯を最も有意義に過すべきのみである。一箇の盲人にどれほど有用の生活をなし得るかを、實地に試むるほかはないのである」と。彼は後援者が出來たのを幸に、遙々蘇格蘭に来て、エデンバラ大學に入學し、毎日妻に手を曳かれながら學校に通ひ、點字で筆記をしては、點字で答案を書き、最も忠實に學問を勉強して居られるのであつた。しかも其の妻といふのは、以前救世軍の療養所に看護婦をした人であるから、かたがた兩人とも、私にあふことを非常に喜ばれたのであつた。

私は又布哇のホノルルを通つた時、そこで一人の日本人に出あうと、其の人が言ふには、「先生、私は癩病に罹つたことがあります」といふ話である。段々その物語を聞くに、布哇では癩病患者は殘らずモロカイ島に送るのであるが、それでも初期の患者だけは、土地の病院で手當をする。此の人の如きは、其の初



期の癩病患者であつたから、取敢ずホノルルの病院に入院したのであるが、若しか病勢が進まうものなら、一生モロカイ島に閉ぢ込められるであらうと思ふと、彼は非常に寂しく、又物悲しく覺えた。そこで懊惱の中から、病院にあつた一卷の聖書をとつて讀み出した處、初には一向其の意味が解らなかつたが、後には追々福音の有難い所が、身に染みて感ぜられた。終に悔改めて基督を信じ、心に大なる安心を得た頃は、幸に肉體の病も癒えて、退院を許可せられたので、それから以後、彼は強い感恩の情に驅られつゝ、一心不亂に神様の榮の爲に働いて居るといふのであつた。

此は又日本の内地での話であるが、某大學病院に産科婦人科の大醫某博士があり、久しき以前、其の夫人が七ヶ月で、月足らずの兒を擧げられた。七ヶ月といへば、餘り早い。けれどもそこは其の道の大家であるから、赤坊が母の胎内にあつて、七ヶ月の頃はどんな風にして居て、どんな營養をとり、又どんな發育を遂

げるかといふやうなことを、残らず明かに知つて居られる故、博士は、最新の科學の知識を應用して、赤坊が母の胎内に居ると、全く同じやうに育て、ゆかうと決心し、二人の最も熟練なる看護婦を附切りにして、手に手を盡させられた甲斐があり、赤坊は育つには育つたけれ共、どういふものか骨格が弱くて、いつになつても、しやんと立つ事が出来ない。此うした苦心が七年ほど續く内に、博士はいつしか科學の力の届かぬ所に、信仰の世界があり、又人間の智惠の及ばぬ所に、神様の御支配の行はるゝ道理を、發明せられたのである。其の際は何でも、私の著した「基督敎講話」など、表紙のとれる迄反覆熟讀せられ、幼兒が七歳でとられた時には、其の代りに愛の神様を見出して居られた。即ち博士が七年間、月足らずの弱い兒に眞實を盡されたことは空しからず、彼は其の間に「神は愛なり」といふ、絶大の眞理を見出されたのであつた。

それ故詩篇の作者はいうて居る、「我苦しまざる前には迷ひ出でぬ。されど今は



我御言を守る。又「困苦に遭ひたりしは、我に善きことなり。之によりて我汝の律法を學びたり」と。深い井に入つて上を仰げば、日中にも星を見得る如く、患難辛苦のどん底から、上を仰いで、慈愛の神様を見出し得るものは、眞に最も仕合な人である。

## 二四 貧しき者の福音

貧乏をどうするかといふことに就いては、救貧、防貧、絶貧などと、種々なる議論や、對策もあることながら、何れにしても、現在私共の前に、此の貧乏といふ大なる事實があつて、大多數の人民にひどい苦痛を経験させて居る。之をどう處置したら可いかといふのは、他事ではない、全く私共箇々の身に差迫る問題である。一體此の貧乏といふ事實と基督教との間には、どういふ關係があるであらうか。

基督は曾て「幸福なる哉、貧しき者、神の國は汝等の有なり」と仰せられた。つまり貧乏人は幸福だと言はれたのである。それは又どういふわけであるか。第一、基督の救は、多くの場合に、人を極貧の境涯から免れしめる。基督を信仰しながら貧乏する者もあれば、失業する者もあるのは、申す迄もない。しかし乍



ら基督に救はれたお蔭で、なまけ者が稼人になり、酒飲が酒嫌になり、不正直な人が正直になつて見ると、そんな人間は、どこへ出しても當てになる。又たよりになるから、したがつて大概、食ひはぐれはないものと見て可いのである。此の間も救世軍兵士なる一労働者の話に、「信仰に入る前は、一人の子供だけでも借金が出來て困つたが、基督に救はれて後は、四人の子供を養うて、それでも借金なしにやつて行けるやうになつたのは、全く神様の恵であります」といふことであつた。

第二、基督の救は私共をして、貧乏な中にも善人たるを得しめる。「神は此の世の貧しき者を選びて信仰に富ませ云々」とあるのは、それである。昔から金もあり、地位もある人々が、善人となつて善事を行はん爲に、態々富貴を抛つて貧乏人となつた例さへ少くない。基督に救はれた人は、貧乏な中にも善人たることを得られる。しかも「善人は國の寶」ではないか。

第三、基督の救は又貧乏人をも、幸福ならしめる。金を澤山もちながら、心配ばかりして世を渡る人々も多い中に、基督に救はれた私共は、貧乏な中にも幸福なる日を送ることが出来る。なせかといふに私共は神によりて、安心と、喜とに満ちた人となるからである。「汝の我が心に與へ給ひし喜は、彼等の穀物と酒との豊なる時にまさりき」と、詩人が歌うたのは、その意味に外ならない。

第四、基督に救はれた貧乏人は、有用の生活を営むものである。それ故にレプタ二つを献げた寡婦は、末代迄も信者の鑑として、世界の人類に大なる感化をのこした。けれども其の資本は、たつた二厘錢二枚に過ぎなかつた。基督の弟子のペテロは「金銀は我になし」といひ、一文なしで世の救の爲に、大なる貢献をしたのである。其の如く、私共が基督に救はれると、貧乏でも能く、生きた甲斐ある生活を営み得るに至るのである。

第五、基督に救はれた貧乏人は、其の行末に天國の希望を有する。基督は財産を



多く有つて、之を恃む者の危険を戒め、「富める者の神の國に入るは、駱駝の針の穴を通るより難し」と仰せられた。けれ共神を敬うて、清貧の生活を營む者に就いては、「幸福なる哉、貧しき者、神の國は汝等の有なり」というて居られる。私共にはやがて貧乏人も、金持も、一切無差別の、神の國に落着く時が来るのである。そこでは唯神々しき人格のみ崇められて、金も寶も、一向幅を利かすことが出来ないものと思はねばならぬ。

第六、基督は貧乏人の友である。神は貧しき一人の義人を忘れず、切迫つまつた時には、必ず不思議に之を救ひ出し給ふ。「わかき獅は乏しくして饑ることあり、されどエホバを尋ぬる者は、よき物に缺ぐることあらじ。」「我昔若くして今老いたれど、義しき者の棄てられて、其の裔の糧乞ひ歩くを見しことなし。」「何は有たずとも、基督の救を有する貧乏人は、幸福なる哉。なせかといふに、其の人は基督と共に、亦萬物をも所有するからである。

## 二五 隣人愛

基督教は飽く迄實行的の宗教であるから、唯單に人を愛せよとのみいはず、「隣人を愛せよ」と教へてある。これは實踐躬行の上から見て、如何にも行届いた教の立て方と言はねばならぬ。

然らば基督教で謂ふ所の隣とは何であるか。支那の昔には「五家を隣と云ふ」といひ、日本には又「向三軒兩隣」などいふ言草がある。基督教でいふ所の隣とは、然うした近所合壁のことかと尋ぬるに、必ずしも然うではない。基督教でいふ所の隣とは「袖ふり合ふも多少の縁」といふ、其の多少の縁のつながつた人々を、残らず引つくるめて、言ふのである。それが近所合壁の人であらうと、三千里外の人であらうと、幼い時からの知合であらうと、電車で偶然乗合はした人であらうと、何ぞ直接間接に交渉を生じた人は、皆所謂隣である。又隣人である。



即ち何ぞの關係で、相手となつたほどの人々は、悉く皆我が隣人として、之を「己のごとく」に愛せよといふのが、耶穌基督の御教である。

然らば私共はどんな風に、さうした隣人の爲に盡したら可いかといふに、第一大切なるは、私共が彼等の間に在りて、聖き生活を營むことである。私共は善人たることによりて、他の如何なる方法を以てするよりも、優つて善事をなし得るものである。」と、ラウランド・ヒルは言うて居る。私共は周囲の人々に對して、其の腐敗をとめる鹽、又暗闇を照す光とならねばならぬ。私共は此の世の罪惡の中に在りて、其の罪惡に染まず、反つて其の罪惡の中から他人を救ひ出す爲に、盡すやうでなくてはならぬ。「鹽となり、光ともなるこの世より、とり給へとはわれも祈らず」と、奥野昌綱氏が歌はれたのは、その意味であらう。

第二に大切なるは、あらゆる機會を捉へて、隣人に親切をすることである。或る場合には、ほんの笑顔で以て挨拶することだけでも、大變な親切になるものであ

る。「笑は愛の言語である。」「笑ふことの出来ない顔に美なるはない。」などいはれて居る。英國にはグッド・モーニング・クラブといふがあり、朝起きて人に出會うたら、誰にでも「お早う」といふ、挨拶をする人達の會である。何でもないことのやうだが、お互に唯それ丈の事を實行しても、此の世の中にどれほど明るい、暖い空氣を作り出すか知れないのである。況んや更に進んで、病める者を慰問し、心配のある人を慰藉し、空腹の人に一ぱいの飯をくはせ、凍えて居る人に一枚の着物を着せるに於ては、それが此の世の中を祝福すること、いかばかりか知れない。基督のお譬話にある、「善きサマリヤ人」が、追剝に出あうて、半死半生に陥つて居る旅人を助けたといふのも、この道理を教へられたものに外なら

ない。

第三、けれ共、隣人愛の最も大なるは、其の隣人を基督に導くことである。望なく神なく、罪と禍との中に、生き甲斐もなく生活する人々に、基督の救を示し、



之を愛の天父に立歸らする位、現在にも、將來にも、其の當人にも、又其の家族にも、幾久しく本當の祝福を與ふる道といふは、斷じて他にないのである。しかもこれは説教したり、文章を書いたりしてのみ、なざる、働でなく、反つて銘々が其の出あうほどの人々に、親切なる言をかけ、其の人々の爲に神様に祈り、之に何か然るべきトラクトを讀ませ、之を集會に誘ひ、之に信仰上の實驗を語るなど、極めて平凡な、誰にも出来る方法手段によつて、案外容易く爲し得らるべきことである。此の間も夫婦喧嘩をして、家内が家を飛出したとかいふ男女があつたのを、或る救世軍人が中に立つて、妻も、夫も、同じ集會に出席するやう取計らうておくと、夫婦とも其の集會にて大に感動し、少くとも妻の方は、其の場で悔改の座に進み出でるといふやうなわけで、會の終には兩人出會うて、互にこれ迄の心得違を詫びつゝ、喜んで一緒に家路に就いたと、いふやうな話を聞いた。聖書に、一人の罪人の救はれた時には、「天に喜あるべし」とも、又「神の使たちの前

に喜あるべし」ともあり。凡そ人に親切をするというて、彼等を基督に導き、之を救に入らしむる位、大な親切も、愛も、此の世にないのである。それ故、隣人愛を實行する最善の方法は、自分が先づ罪より救はれて、進んで他人を救に入らしむるに限るものと、思はねばならぬ。

二六 基督の心象大乗



### 二六 基督教の小乗大乘

佛教に「小乗」「大乘」といふ語がある。「乗」とは人を船にのせて、此の岸から彼の岸に届ける意で、小乗とは卑近な教、大乘とは深遠なる奥義を指すのだからである。若し然うした物の言ひ方を、基督教に當嵌めることが出来るものとすれば、私の考へでは、基督教の小乗は、人を罪より救ふことである。其の大乘は、進んで全き愛の人となることであると言ひたい。

基督教は人を罪より救ふ所の宗教である。「汝其の名を耶蘇と名づくべし。己が民を其の罪より救ひ給ふ故也。」又「基督耶蘇、罪人を救はん爲に世に來り給へりとは、信すべく正しく受くべき言なり」などある如く、耶蘇は悔改めて、其の御名にたよる者を救ひ給ふ。耶蘇を信仰する者は、其の過去に犯せる罪を赦さるのみならず、新しき心を授けられて、前とはちがうた、清く正しき生活を営み

得るのである。其の結果としては又、これ迄にないほど、安心で、幸福で、善良で、心に咎なき毎日を過し得るに至るのである。

此の意味に於て、基督の宗教は放蕩息子が父に歸るの宗教である。即ち天の父の前に、放蕩息子同然の世渡をして居つた罪人が、お詫が叶うて御許に歸り、今一度神様と親子の名乗をするばかりか、其の罪に穢れた襤褸着物を脱がされ、以來基督に似た新しき品性の上着をさへ、纏はせらるゝといふ宗教である。

それ故ジョン・ニュートンは年が寄つて、しきりに物忘れをするやうになり、それでも言うには、「こゝに二つだけ、どうして忘れられぬ事があつて、それは私が大なる罪人であつた事と、又基督が私を救ひ給うた事とである」との話であつた。又エデンバラ大學の名教授ジェームス・シンブソンは、麻酔劑など種々發明した人であつたが、或人が彼にむかひ、「貴君の一生の最大發明は、何でありましたか」と尋ねると、「それは自分が罪人の頭にて、耶蘇基督は其の私をさへ救ふ



救主であるのを、發明したことである」といふ返事であつた。此の如く基督教は人を罪より救うて、眞に善良、安全、幸福の生活に入らしむる宗教である。貴君は既にそれを我が身に經驗して居らるゝであらうか。

けれ共まだ其の奥がある。基督教は人を罪より救ふと共に、亦進んで之を全き愛の人たらしむる所の宗教である。神は愛である。愛の在る所には神様が在るのである。基督の新しい誠といふのは、互に相愛することに外ならない。随つて人の履むべき道は愛である。即ち「凡て人にせられんと思ふことは、人にも亦其の如くせよ」といふ、黄金律の他にないのである。しかも私共が罪から潔められて、神の御霊を心に宿す者となる時には、私共は其の結果、愛の人となり、愛の生活を營んで、又愛の奉仕を行ふものとなることが出来る。

此の意味に於て基督教の宗教は、善きサマリヤ人の宗教である。即ち神様を愛し、人を愛する爲に生くる宗教である。殊に自分よりも弱き、氣の毒な状態にある人の爲に、之が濟度に盡瘁する所の宗教でなくてはならぬ。私共は基督に救はれて、幸福、安全、歡喜の生活に入るのみならず、若し必要なら、それらのものを犠牲としても、往いて世の人の救の爲に奮闘する所迄、踏込まねばならぬ。是即ち基督が「神と等しくある事を固く保たんとは思はず、反つて己を空しうし、僕の貌をとりて人の如くなり。」又「己を卑うして死に至る迄、十字架の死に至る迄順ひ給うた」御精神に、あやかるといふものである。

先頃日本に於ける感化事業の先覺者、留岡幸助君が病を得て轉地療養中、私が少しばかり眼を患うて居ることを聞いて、寄せられた見舞狀の奥に、「下つみの米や蟲くひ鼠くひ」といふ一句を認めてあつた。嗚呼下積みの米は蟲も蝕うであらう、鼠も蝕うであらうけれ共、其の下積みとなつて社會に盡すことを甘んずる者がなければ、此の世は立ちゆかないのである。我が同胞は救はれないのである。基督教を信じて罪より救はれ、自分が仕合になるのは、其の小乗である。進



んで自分の幸福安樂を犠牲にしても、他人に奉仕する所の、愛の生活に入るのが、其の大乗である。貴君はそこ迄の恩寵を身に經驗せられて居るであらうか。

### 二七 最も大なるもの

世界最大のものは愛である。私共は愛の宗教の宣傳と實行とに、一生を献げたいと、願ふものである。

米國の太平洋沿岸に、フランスノといふ處がある。そこには若干の日本人が住んで居るので、數年前日本人の救世軍を開かれたが、どうも思ふやうに行かない。果てはもう止めてしまつた方がよいのか知らぬと、疑はるゝほどであつた。それがいつのほどよりか、忽ちえらい勢で發展を見るに至り、多數の人々は、其の市のみかは、十數哩、數十哩の近在近郷から寄つて來て、基督の救を求め、前とは見ちがへるやうな、堅氣で、幸福な生活を始めて居る始末。いはばリバイバルの狀況にて、しかもそれが唯數週、若くは數ヶ月でなく、既に數年の長きに亘つて、續いて居るのは、不思議といふも餘ある有様である。

最も大なるもの



事のこゝに至つた由來は、其の小隊の受持士官が、頻りにそこらを巡つて愛の奉仕をして居たのが、一遍に果を結んで、斯くなりたるものゝ如く見える。其の受持士官といふのは、別段學問のある人でなく、聖書に明るいとか、又は辯舌がさわやかだとか、いふたちの人でない。けれ共基督教の眞髓である愛を心に得て、之を身に行ひ、多くの人々の僕となつて、捨身で愛の奉仕を營んで居る處に、其の一切の成功の秘訣はあるやうである。

今其の二三の實例を擧ぐれば、フレスノから十七哩を隔つる處に、日本人の一族があり。其の主婦は眼病を患うて居るので、夫は之が治療の爲に、二千弗をつぎこんだが、一向効果が見えない。其の内彼は事業に失敗して日雇人夫となり、眼病の妻と二人の子供を抱へて苦んで居るのを、救世軍の士官が聞きつけ、米國人の郡立病院に交渉し、一回十六弗宛の注射を全く無料にしてもらひ、毎週一回自分の自動車にのせ、十七哩の處を運んで治療に通はすることゝなつた。米國で

は自動車にのるのは、日本で下駄をはくやうなものだから、救世軍の貧乏な小隊長でも、やすいフォードの自動車一臺は、必需品として、之をもたない者は、殆んどないのである。さうすると其の経過が案外宜しく、さしにも悪い目が少し宛見え出した。それと同時に彼女の心の眼も開けたのである。どこにか、こんな親切で、かたじけない宗教が復とあらうかと。彼女は救世軍士官に連れられて、病院に通ひ出して八ヶ月目に、悔改めて信仰に入つたのである。そのうちに彼女の夫を始とし、近所の人達も多く救世軍に来て、同じ信仰に志すことゝなつた。或時前のは異なる方角で、之も十六哩ほどある所に火事があり、一日本人の家が焼けて、其の主人と娘とが大火傷をした。其の事を電話で知らする人があつたので、士官はすぐにかけてつて、二人を病院に連れこんだが、間もなく娘は死んだ。そこで其の主人を車にのせて郡立病院に運び、施療患者として入院の手續をしてやつたのである。けれ共施療患者には、附添が泊り込んで世話することを許



されない。且彼の妻には二人の子供もあるもので、士官はそれから三十六日間、毎日彼の妻と子とを自動車にのせて、其の家から病院へ看護に通はせた。又火傷の傷が直り口に向いて、皮がめくれるのを、看護婦が剥がすと、患者が「痛い、痛い」というて、苦しむのだが、救世軍士官が祈をしながら、親切の手で、そつと剥いでやれば、痛くないといふので、そんな面倒迄も見てやつた。而して彼の火傷が直つて退院した頃には、彼も、其の妻も、近所の人々迄も、幾人もなく、慈愛の神様を信仰するに至つたのである。

或時フレスノの支那人町に、血を吐いて倒れて居る日本人があつた。みんな其の周囲を取巻いて立つて見て居れど、さて手を下して、之を世話するものとは一人もない。そこへ、救世軍士官が其の報知を受けて飛んで来た。すぐに病人を抱き起して自動車にのせ、家に連れ歸つて介抱しながら、やがて入院の手續をしてやつたが、彼は間もなく、心からの感謝に溢れつゝ、病院で息を引取つた。結核

のひどいのであつたさうである。

又一人の僣癩の青年があつた。其の母は、子のせむしは直らぬにしても、其の腸のあたりが、年中痛むのだけでも治療してやりたいと、數哩先からフレスノに出で来て、苦心して居るのを士官が知つて、其の爲に種々治療上の便宜を取計らひ、幸ひにして青年の腸部の痛みが全治した。そんなことなら其の青年の家族は全部、救世軍人となり、殊に青年の父と、叔父と、又其の青年の兄とは、それぞれ下士官として、其の地方の人々の爲に、盡して居るのである。

私は先年フレスノに行つた時、實際右物語の中の、目の悪い婦人だの、せむしの青年だの、又其の青年の両親だのに面會し、今更の様に、愛の奉仕の力の如何に偉大なるかを、感嘆に堪へなかつたのである。げに愛は世界最大のものである。何卒此の愛を以て同胞に奉仕し、又此の愛を徧く世界に普及せん爲に、戦ひたきものである。



二八 いと小さき者の一人

米國の救世軍は世界大戰後、これ迄にないほど其の聲價を高め、非常に信用を増して、其の事業がえらい勢で進歩して居る。現に數年前、太平洋沿岸の米國に日本人の救世軍が出來た際、其の指揮官たる小林少佐は、桑港、グーリー街に室の數だけでも五十幾つある、あつらへ向の家を見つけ、それを借受けて日本人部の本營に用ゐる度と思ひ、其の家主なる一米國人を訪ねて相談に及ぶと、家主が言ふには、「宜しい、救世軍の爲に用ゆるなら、二つの條件で、快くお貸し申さう。即ち第一、向ふ六ヶ月間無料で使用する事。第二、若し其の期間に返せといふ場合があつたら、家主から一千弗辨償する事。第三、六ヶ月後も引續いて使用する様であつたら、家賃は一ヶ月五十弗と定むる事」といふ、まるで牡丹餅で頬ぺたをたたくやうな話であるから、「貴君はどうして、さういふ事を言はれますか」と

問ふと、「世界大戰中、救世軍が陸海軍人の爲に、掻い所に手の届くやうな奉仕を、しかも捨身になつてやつたのを、實地に見て感佩して居るから、其の爲である」といふ答にて。數年後には又、其の家を格安に救世軍に賣つてくれ、現にそれを日本人部本營として、會館、幼稚園、療病所、寄宿舎、養老院等、種々なる事業を、何でも其の一軒の家で、經營して居るやうな次第である。

これは如何に米國人が、現在の救世軍を見てゐるかといふ、たつた一つの實例に過ぎない。それにも拘らず、其の初、米國が世界大戰に参加した當座、救世軍が陸海軍人の爲に盡し度と申出た時など、當局者から、「其の必要を認めない。救世軍は矢張、大道で演説々教でもして居つたら、澤山であらう」といふやうな、極めて冷淡な挨拶を受けたのであつた。

これ共救世軍ではそんな當局の態度に頓着なく、先づバーカー大佐といふ人を佛國に送つて、戦地の實況を取調べさせ、其の報告にもとづいて、續々男女の士官



を戦地に派遣し、あらゆる方面から、真に至れり盡せりの奉仕をした結果が、即ち前にいうたやうな、米國人の今日の信用と尊敬とを受くるに至つたのである。所が其のバーカー大佐が、最初佛國に向ふ時であつたが、戦地に行く途中、又行つて後の便利のためと思ひ、ワシントン市の中央政府を訪ねて、時の大統領書記官ジョセフ・タムルチー氏に會うて、其の紹介状を求めると、氏は早朝からつめかけた二三十人の來客のある中を、殆んど誰よりも先に大佐に會うてくれた。そこで來意を告げて其の紹介状を請ふと、そばに坐つて居つた一紳士が、書記官とは別懇の間柄と見え、いかにもなれなれしく、「ジョー、大佐の言はるゝ通り、根限り丁寧な紹介状を書いて、救世軍にあらん限りの便宜を與へてくれ給へ。僕をこれほどにしてくれた救世軍だもの、屹度戦地でも善い働をするに定つて居るよ。」と、いひ出した。この横合から出しぬけの極めて厚意ある助言に、大佐は驚いて、其の紳士に、「貴君は一體どなたですか」と尋ねると、答へて、「私は以前ゼルシー

市に住んだ某といふ者で、若い時に身を持崩し、財産も、信用も、共に失うて、夫婦別れをせねばならない始末に立至り、途方にくれて居た處を救世軍の社會事業に救護せられ、それから悔改めて新しき生活に入り、今一度妻とも一絡になり、爾來業を勵み、産を治めて、漸く今日の身分を造つたものである。救世軍のさうした恩は、いつ迄も忘れません」といふのであつた。

そんなことから書記官は早速、特別に入念の紹介状を、パリ駐在の米國大使宛に書いてくれ、大使からは又後、パーシング大將、ホツシユ大將等へも、丁寧に紹介してくれるといふやうなわけで、そのため大佐は佛國にて、各方面に悉く豫期以上の便宜を得、それらの結果、前いふ如く、米國の救世軍は大戦中に素破らしい奉仕をなし得たのみならず、引續き大戦終熄後の今日迄、いよいよ勢猛に、其の救世濟民の大運動を、突き進めつゝあるやうな次第である。

しかも其の當初、大統領書記官の友人某が、以前ひどい落ぶれ方をした時、救



世軍から世話になつて今一遍身を立てた事實が、書記官をして特別入念の紹介状を書かすむる機縁となり、それが終にあれ程の大運動の手引となつたものとすれば、それにつけても大切なるは、私共がかねてから「此等のいと小さな者の一人」の爲に、どんな骨折をも厭はず、盡瘁して置くべきことである。

## 二九 神の愛國者

米國上院議員ハンナは、或時救世軍人のことを論じて、之を「神の愛國者」と呼び、「人は皆斯くありてこそ、眞の愛國者たるを得べきなれ」というて、之を激賞した。思ふに眞の救世軍人たることは、其のまゝ、眞の愛國者たることである。今その理由を略述すれば、私共が救世軍人たることは、基督を信じて、罪より救はれたことを意味する。即ち其の以來、凡ての不義を改めて、義しきを行ひ、凡ての穢を去つて清き生活を営み、又凡ての身勝手氣儘をやめて、愛の世渡をすることを意味する。しかもさうした人々が家庭に居れば、其の家庭が幸福圓滿なるのは、あたりまへのことである。なせかといふに、さうした家庭には酒がない。道樂不身持をする者がなく、喧嘩口論がなく、又嫉みそねみがない。反つて互に相救し、相容れ、相愛するばかりであるから、かゝる家庭の幸福圓滿なるべきは、



更に疑ないのである。

かやうな人々が社會に立てば、社會は面目を一新するであらう。なせかといふに、斯る人々は其の職業を勉強し、正直律義を以て萬事を行ひ、親切を以て人に對し、責任を以て本分を盡す故、自然と彼等の周圍が明るくなり、又住み心地好くなるのは、申す迄もない。救世軍の創立者の言に、「國家の眞の隆盛は、たゞ善良、眞實、有爲なる人民の増加によつて、期すべきものである」と、いうてある。然るに救世軍が世に廣まることは、其の善良、眞實、有爲なる人民を増加へるわけであるから、此の點から言うても、私共が救世軍に熱心するのは、即ち國家に忠義を盡す所以に外ならない。又眞の救世軍人たることは、其のまゝ國家の隆盛を助くる所以であるを見て、差支ないのである。

加之、救世軍人は世を救ふ爲に戦ふものである。即ち自分たちが善人となるだけで満足せず、進んで世にもつと多くの善人を造らん爲に、不斷の戦争を續くものである。更に精しく言へば、(一)救世軍人は世の罪人を救はん爲に戦ふものである。人は皆神様の前に罪を犯し、其の結果として、一切の禍を身に受けて居る。しかし乍ら救世軍人は、さうした罪人を罪より救はん爲に奮闘するものである。其の爲に酒飲が酒嫌になり、道樂者が堅氣になり、なまけ者が勉強家となるやうな例は、幾らでもある。

(二)救世軍人は婦人の地位を高むるものである。婦人をして男子と同じやうに、神様と人道との爲に働かしめる。その上に又、墮落した不幸な女性を救うて純潔な生活に入らしめる。

(三)救世軍人は兒童を重んずる。即ち兒童を神様からの預り物として、其の御意にかなふやうに、育てることを心がける。

(四)救世軍人は世の貧しき者、弱き者に同情し、彼等をして各々其の所を得しめん爲に、盡力する。それも彼等を下手に助けて、之を害ふやうなことをせず、彼



等をして自ら助けしめん爲に、彼等を助くことを心がける。

(五) 救世軍人は又犯罪人、不良少年等の爲に盡し、基督の救によりて、彼等を眞の改過遷善に至らしめん爲に努力する。

(六) 救世軍人は又氣の毒な病人に對し、肉體の治療と合せて、其の靈魂の救はれん爲に力を盡すのである。

しかも此等凡ての事を、耶穌の御力によつて行うて居るのである。又神様を信する信仰の上に實現して居るのである。救世軍の創立者が日本に來朝の砌、彼は我が同胞に告げていうた。「新しき日本、更に幸福にして偉大なる日本を造らんとすらば、日本國民は、其の爲に善良なる國民となり、慈愛の國民となり、又敬虔なる國民とならねばならぬ」と。然も救世軍は、日本國民を更に一層善良、慈愛、敬虔なる國民たらしめん爲に働く團體であるから、これ位眞剣な愛國は他にあり得ない。私共は眞の救世軍人たる事によりて、眞の愛國者たらん事を務むる者である。

### 三〇 基督教の感化と國難

私は今「基督教の感化と國難」といふやうなことを、少くお話し申し上げたいと思ふ。別段こみいつた道理を論じやうとするのではない。唯極めて單純に、實際あつた物語を、御紹介致したいと思ふのみである。

ハンガリーの國に救世軍を開かれたのは、漸く數年前のことであつた。或日其の司令官ロスデイン大佐が、本營といふも名ばかりの、狭い事務所の一室に立てこもり、書信を認めて居られると、そこへ戸を叩いて入り來つた一壯年があつた。「私を御記憶ですか」といふから、其の顔を見ると、昨夜の集會で悔改の座に出た中の一人であつたから。大佐は「よく憶えて居ります。眞に結構なことでした」と挨拶すると、「私が何人だか知られたなら、貴君はもつとお喜になるでせう」というた後、壯年は大佐と卓子を隔て、坐りながら、おもむろに次の様な話



をし出したのである。私は名をケルスチンというて、最も過激な無政府黨員であります。少く共昨晩迄は、最も過激な無政府黨員でありました。私は數週前所屬の團體から命令を受け、或る重大事件を執行する爲に、此のブタベスト市に参り、それを見事に遂行せすば止まじと堅い決心をして、機會を待つて居る折柄、一夜救世軍の前を通りかゝり、其の楽しい唱歌に引きつけられて集會に列り、其の節貴君から軍歌の本を一冊譲つてもらうて歸りました。それが私の救世軍に接近した始である。私は宿に歸つて、あの軍歌の本から歌ひました。而してそれは、如何にも幸福な、よく出来た歌であると思ひました。その結果、私は昨晩今一遍、出直して救世軍の集會に列り、其の場で悔改めて基督の救を求むるに至つたのであります。その重大事件とは何かとお尋ねになりますか。それはハンガリーの攝政宮、ホルセー提督を暗殺しようといふ計畫であります。私は十分其の成功を確信し、あらゆる準備を残りなく調へた矢先に、忽ち救世軍に出あう

たのであります。けれ共私は基督に救はれて、今は敵をも愛する人間となつて見ますれば、最早左様な非常手段を用ゐて、他人に危害を加へることは出来ません。何事も凡て平和の手段によつて之が解決を求むべきものと、考へるやうになりました」と。

此うした正直なる告白の後、彼は大佐に請うて、共に神の御助を祈つてもらひ、上からの御力に勵まされつゝ、進んで最寄の警察署に自訴して出ることゝなつた。後日大佐も證人として一度ならず法廷に現れ、ありの儘に、其の知る事實を語られたのであるが、それが一々ケルスチンの言ふ所と符合するので、此は今一度、救の御力を周圍の人々に證する好機會となつた如く見える。申す迄もなく、當時其の國の新聞といふ新聞は、いづれも暫くの間は、その事に關する記事で、持切つたやうなありさまであつた。ケルスチンは、爲に十三年の懲役を申渡さるることゝなつたが、後、救世軍からの嘆願が功を奏し、刑期を減じて、十年の懲



役といふことに改められた。而して救世軍からは又、いつでも彼を刑務所に訪ねて、之と面會することが出来るやうな、特別な取扱をせられることゝなつたのである。

此の判決があつてから數ヶ月の後、ブタペスト市に萬國博覽會を開催せられ、一日攝政宮殿下にも、之に台臨あらせられたのであるが、殿下が會場を御巡覽中、圖らずも救世軍の貧弱な出品のある所迄、お出になると、殿下には供奉の者を離れ、つかつかと進んで、そこに居合せたロスデイン大佐に近づき、種々懇篤な御言をかけさせられ、且堅い握手を賜うて、そこを去らせられたといふことである。

斯してハンガリーでは、あぶなく攝政宮殿下に危害を加へ奉らんとする者が、救世軍の感化を受けて其の計畫を抛つたばかりか、自ら其の一切の顛末を告白して、甘んじて獄中の人となつた爲に、一つの國難を未然に濟ひ得たのであつた。

私共はこんな物語が、何等我が日本に關係のないことを、神様に感謝する。それと同時に、諺にも「濡れぬ先の傘」又は「轉ばぬ先の杖」などいふことがあれば、それにつけても私共は、益々奮うて、盛んに此の福音を我が同胞の間に宣傳し、國家を泰山の安におかん爲に、力を盡さねばならないのである。

三十一 一人の熱心な宣教師



### 三一 一人の献身的努力

救世軍が不思議に北海道の北見、十勝の邊に盛んになつたに就いては、其の由來が至つて面白い。早や二十年も前のことであつたかと思ふ。或時北見國遠輕の某氏から、救世軍本營宛の手紙が來た。文字が讀みにくい上に、文句が東北のなまりで、十分には解せないけれども、其の言ふ所によれば、自分は北海道の奥地で農業に従事するものにて、平生神様の爲、人の爲に何か御奉公したいと思へど、何一つ出来ないことを残念に思ふ。そこで農業の閑散な時には、三度の食事を二度に減じて、儉約した金を救世軍に送るから、どうか世の救の爲に用ゐてもらひたい、といふものゝ如くであつた。而して其の手紙と共に、最初の年には金貳拾圓を送つて來られたのである。

それから次の年も、又其の次の年も、同じやうに送金して來られ、そのうち金高も追々増して、終に五十圓に達したと、記憶して居る。しかも、其の間自分の文字の讀み難いのを避ける爲に、二號活字の、假名と數字とを買入れられたものと見え、それに一字づつ、朱肉をつけて、「は」「い」「け」「い」といふ風に捺して來られ出したから、それ以來文字は大層讀み易くなつた。けれども其の語のなまりは、些とも前とは變らなかつたのは、もとより止むを得ないことであつた。斯くて數年の後、某氏は唯金を本營に送つて居るだけでは、物足りなくなつたと見え、「どうか一人の士官を北見國に派遣してもらひたい」と、申越さるゝやうになつた。けれどもこれは其の當時の救世軍に取つては、仲々容易な問題でなかつたら、「残念ながら、急に其の運には參り難い」旨答けておくと。「それでは私が救世軍を見習に、東京にゆくが可いか」とのことであつた。「喜んでお迎へ申上げる」と答へておくと、某氏は乃ち上京せられたのである。



て今一度、北見國に歸り、近所の人々を一人一人勧誘せられた結果、早や幾人かの同志が出来たといふ通知に接したので、最早だまつて居ることが出来なくなり、本營に於ても、都合して一士官を遠輕に派遣することとなつたが、それが本にて、遠輕に一小隊を設けられたのは言ふまでもなく、其のうちに遠輕から始まつて、段々と、紋別、本別、帶廣、瀬戸瀨、小向、其の他の地方に迄も、今日のやうに、小隊、若くは分隊を見るに至つたのは、眞に目ざましい發展を遂げたものと、言はねばならない。(某氏は今も遠輕小隊の曹長として、忠實に働いて居られる。)

然らば前にいうた某氏、其の他遠輕にて、率先して救世軍人となられた諸君は、どうしてさういう志を起すに至つたのかと、尋ねて見ると、それより數年前、救世軍大尉谷川平右衛門なる人があり、當時本營が事業は廣がる、金は足りないといふので、彼を集合係に任じ、北海道に行つて、金を集めるやうにといふこと

を命じた。そこで谷川大尉は遙々、誰一人知邊もない北海道に赴き、旭川から先は、まだ汽車のない處を、馬にのつたり、草鞋ばきで歩いたりして、北見國までも出かけ、若干の金を集め得たと同時に、遇ふほどの人々に正面から基督の事を語り、又「ときのこゑ」と「平民之福音」とを讀むことを、勧めておいて歸つたのである。

然るに其の際、谷川大尉の勧めに従ひ「ときのこゑ」と「平民之福音」とを購讀し出した人々の中から、やがて進んで基督を信じ、其の救を受けた者が幾人かあり。即ち前に言うた某氏、其の他遠輕救世軍の中堅となつた人々、又同じく遠輕の日本基督教會の土臺となつて居る人々迄も、多くは皆、當時谷川大尉の勧めにて、「ときのこゑ」と「平民之福音」とを讀み出した人々であつたと聞いては、如何に小さい物事の起原が、大な結果を齎したかを、驚嘆せずには居られない。聖書に「誰が小さい事の目をいやしむる者ぞ」とあり。眞に尤もの事といはねばなら



ない。

谷川大尉は後病を得て死んだ。何分救世軍の初代の話であるから、今時の軍人には、日本の救世軍に、曾て谷川大尉などいふ人物があつたことさへ、知らない人が多いであらう。しかし乍ら彼が多年の以前、人の知らない時に、北海道の奥まで金集めに出かけて、其のあひだく、機會を捉へて基督を證言したのは、無駄ではなかつた。さうして播かれた「神の御言」の種は、其のまゝ、幾人かの眞實なる人の心の畠に落ち、それが時に及んで芽を出し、苗となり、苗が長じて穂が出で、穂の中から豊なる結實を見るに至つたのみならず、一つの畠に生じた苗は、更に他の幾つかの畠に移し植ゑられて、到る處、三十倍、六十倍、百倍の實を結ぶを見るに至つたのは、どういふ目ざましい事であらう。

これに由つて見れば、一人の至誠眞實は、眞に貴きものである。一人一人が罪より救はれ、神様の召に聽き従ひ、身も靈魂も獻げて、唯神様の榮と人の救との爲に起ち上る時、假令それが極めて平凡な一人物であつたとしても、神様は能く其の人を潔め用ゐて、殆んど人間業としては、説明の出来ないほど、高貴にして、又雄大なる奉仕をなさせ給ふものである。谷川大尉が北海道の奥地にのこした、偉大なる感化の事は、此の道理を證明して餘があるではないか。「されば我が愛する兄弟よ、確くして揺くことなく、常に勵みて主の事を務めよ。汝等其の勞の、主にありて空しからぬを知らばなり。」



三三二 汝の母の祈を記憶せよ

久しい以前、英國の軍艦が横濱に入つた時のことであつた。救世軍の英國人士官が、それを訪問に行くといふから、私もついて行つて見た。既に行つて甲板で集會を始めると、水兵は數多く寄つて來るには來たが、甲板に寢轉つて居るものもあれば、仲間の者の肩に手をかけたものあり、太いパイプで烟草をくゆらして居るものあり、餘り行儀の好い圖ではなかつた。其のうちに救世軍士官の一人が、ギター（樂器）に合せて獨唱を試み、殊に「をりかへし」に、「汝の母は今も汝の爲に祈れり、ジャックよ」といふのを歌ひ出すと。寢轉んで居つた者は起き上り、肩に手をかけて居つた者は其の手をおろし、烟草をくゆらして居つた者は、パイプをポケットとに納めた。而して早や其の「をりかへし」を憶えて、一緒に歌ひ出す者もあり、さうかと思ふと、兩の頬に涙のつたうて居る者も幾人か現れ、それ

はそれは緊張した、有益な集會を營むことが出來たのである。私は其の様子をちつと見て、さては英國人といふものは、「汝の母の祈」といはれると、頭があがらなくなるのだなと、深くも感動したのであつた。

その頃救世軍の本營は、もとの新橋驛の前にあり、粗末な木造三階建の小さな家を借りて用ゐたのであるが、ある日裏の待合に、英國人だか、米國人だか知らないが、兎に角英語を使ふ外國人が四五人登つて、大騒をして酒をのんで居る。「氣の毒な人たちだ。外國へ來て、あんな淺ましい眞似をして居る。何とか忠告してあげる分別はないものか知らん」と考へる途端に、思ひ出したのは、先達の英國軍艦での經驗であつた。若い元氣にまかせて、直に大な文字で一枚の白紙に、「汝の母は今も汝の爲に祈れり」と、英語で書いた。相手が水兵でないから、「ジャックよ」は略したのである。而してそれを隣の待合からよく見える、こちらの窓の脇に貼り出すと、其の西洋人の連中が「何んだ、何んだ」というて、窺いて居るら



しかつたが、間もなく、さつさと引揚げて歸つて行つた。うまく成功したわいと喜んで居ると、隣の待合では大事なお客を追ひ返されて、迷惑千萬に覺えたのであらう。やがてこちらの窓に向うた處に高い板塀を設けて、私共の建物と向の家との間を、全然しきつてしまつた。お蔭で光線は入らなくなる、空氣の流通は悪くなつて、閉口したけれども、此は自分で播いた種を、自分で刈り取つたのであるから、もとより誰に對うて、何と訴ふべきやうもなかつたのである。

それから十數年後、歐洲大戰の最中、私は救世軍の用事と共に、戰時社會事業といふやうなものを取調のために、數ヶ月間歐米を旅行したのであるが、到る處海陸軍人の休憩所だの、宿泊所だのを訪ねると、その客間にも、食堂にも、寢室にも、一番多く書きつけてある標語は、悉く「汝の母の祈を記憶せよ」といふ一句であるのに心付いた。段々聞いて見ると、英米の海陸軍人は、出先で不品行でもしようとする際、「汝の母の祈を記憶せよ」といはれると、足がすくんで、そ

んな場所には寄りつけなくなるのだといふ話であつた。

ナポレオンは其の時代の佛國に、一番缺けたものは母であるというたが、私は又今の日本に一番缺けたものは、祈をする母であるといひたい。度々引合に出るアウガスチンの母モニカは、其の眞實熱誠なる祈の力によつて、能くあれ程迄に迷うた我が子を引戻して、正しきに歸らしめたではないか。救世軍の母ブース夫人は、幼い子たちを膝下に集め、その爲に神様に祈り、時としては、「神様よ、此の子供らの中一人でも、他日惡人となるものが出まするやうなら、寧ろ今の間に、この世からとり去り給へ」と言はれた。而して其の熱い涙が、ポタリポタリと子供らの頸筋におちた印象を、彼等は終生忘ること能はず、後日揃ひも揃うて、あれほど立派な人物になつたのだと、承知して居る。どうか我が日本にも、いとしい我が子供らの爲に、もつと眞實なる祈をする母を、多く得たいものである。



三三三 兒童に宗教を與へよ

キリストは「幼兒らの我に來るを許せ、止むな、神の國は斯の如き者の國なり」といひ。又「汝等慎みて、此の小さき者の一人をも侮るな。我汝等に告ぐ、彼等の御使たちは、天に在りて、天に在す我が父の御顔を常に見るなり」などと仰せられ。子供を大事にして、逸早く之を救に導くべきことを示して居られる。

ポリカルプは九十五歳で、殉教の最期を遂げる時、「私は去八十六年間キリストに仕へて其の恵を蒙むつた」というて居る。即ち彼が九歳の時から、信仰生活を始めたことが、わかるのである。マシュー・ヘンリーは十一の年に救を求め、リチャード・バックスターは、幼年時代に基督を信じた。アフリカの大傳道者となつたモファットも、同じく少い時に神様に心を献げたのであつた。多く讚美歌を作つたワット博士は、九歳の時に回心し、ドラモンド教授は又九歳の時に、耶蘇を救

主として受け入れたのである。ジョンナサン・エドワードは七歳にして基督に従ふ者となつた。ジョン・ウエスレーの母スザンナに、十九人の子があつたが、彼女はそれを皆五六歳迄に、信仰に導きたいとの願を以て育てた處、希望通りにいつたさうである。ジンゼンドルフは四歳の頃から、をさなごゝろに神様を慕ひ、幼い時から「芥種會」などといふものをつくり、他人を信仰に導くことをさへ、心がけた。救世軍の創立者ブース大將、及び夫人の間に與へられた、八人の子供らは、残らず十歳になる前に、一生基督に仕へる決心をしたのであつた。

エバン・ホブキンスは其の六歳になる長子に、基督の恵の中に留るべきことを教へやうとして、紙に大なる輪をえがき、其の輪には二つ三つの出口をつけ、然る後一本の鉛筆を輪の中において、「御覽なさい、お前が神様の恵の中に居るといふのは、丁度此の鉛筆が輪の中にある様なものだ。鉛筆は輪から外へ出てはいけな

兒童に宗教を與へよ



れと同じ様に、お前が神様の恵の外へ出る出口が幾つかあつて、それは、短氣をおこすこと、氣儘をいふ事、不親切をする事などであります」といひきかせる時、子供はよく其の意味がわかつたやうであつた。それから數日の後、子供が聲を放つて泣いて居るから、「どうしたのか」と尋ねると、「お父さん、私は輪の外へ出たのです。氣儘をして輪の外へ出たのです」というた。「それではもう一遍、輪の中へ返らねばなりません。一緒にお祈をしませう」というて、子供の爲に祈り、又子供にも祈らせると、其の時から彼は本當の信仰に入つて、以來大層心だての善い子となつたさうである。

紐育のチングといふ人は、恐ろしい吹雪の日に、たつた一人の幼い女の兒を相手とし、多人數集つた集會と同じやうに念を入れて説教し、その女の兒を信仰に導いた處が、彼女は後大層熱心な信者となり、少くとも二十五人を基督に導いたが、其の中の一人はチングの男の子であつた。トローレーの話に又、彼が曾て二人

の子供を信仰に導くと、二人共歸つて其の家の人たちに救の道を語り、到頭どちらも、家内中残らず救主を求むることゝなつた。同じくトローレーに由つて導かれた一人の少女は、トローレーの演説を筆記しに來た新聞記者を信仰に導き、その人が後に目ざましい、力ある基督教の働人となつたさうである。

有名な説教者スボルジョンは言うた、「私は私の所で信仰を始めた大人よりも、むしろ幼兒の信仰生活に、多くの信用をおくのである」と。ムーデーは又いうて居る。「私は日曜學校に來得る年齢の子供なら、亦救を受け得る年齢に達したものと信ずる」と。救世軍の創立者の言に又、「子供らの靈魂の救の爲に奮闘なされ。恐らく其の骨折の報として、多くの高尚にして祝福せられた生活を營む人物を、彼等の將來に見ることが出来るであらう。時には一向骨折甲斐がない如く見ゆる子供と雖も、年を経て彼等が此の世の旅路をあらかた終り、死の河邊に近く時、忽ち其の昔諸君から教へられた救主の事を思ひ起し、御名を呼びつゝ榮の



御國に入る者もあらう。それ故子供らの救の爲に盡されよ」と、いうて居られる。お互心に銘記すべきことであると思ふ。

### 三四 人生の分岐點

人間は折々左に行かうか、右に行かうかといふ、分岐點に立つことがある。殊に青年男女が、其の將來の目的を定め、又は方針を立てようとする場合に、多く然うした經驗をするものである。斯る場合に謙遜して神様の御旨のある所を尋ね、其の指導に従うて、間違なく歩むことの出来る人は幸福である。「汝凡ての道にてエホバを求めよ、さらば汝の途を正しくし給ふべし。」又「汝の作爲をエホバに任せよ、さらば汝の謀る所必ず成るべし」などと、教へてあるのは、それである。それに就いてこゝに二三の事實談がある。

或時三人の青年が散歩して居るうち、二人が今一人を誘うて料理店に登つた。而して言ふには、「今日はお互の健康を祝うて一杯飲むことにしよう。飲むのが厭だといふ者は、三人分拂はずぞ」と、こんな風に言ひ出した。それを聞いて、一人



の青年は非常に憤慨し、「それでは僕が三人分拂ふ」といひ、金を投げ出して置いて、そこを飛び出し、家に歸つて頻りに神様に祈つて居ると。神は彼にむかひ、「青年は虚榮を求め、老人は地の事のみ考へて居るのだから、汝は彼等を離れて路傍の人の如くなれ」と宣ふと覺えた。乃で彼は其の覺悟を定めて、必死に道を求め、後大に得る所あつて、多くの人々を同じ信仰に導くやうになつたのが、即ちフレンド派の開祖ジョージ・フォックス其の人であつた。

或時二人の青年が打連れて酒をのみにゆく途中、一人の方は基督教會堂の前に聖書の一句、「罪の拂ふ價は死なり」と書いてあるのを見て、其の心をうたれ、「僕はもう飲みにゆくのは厭になつた」と言うて、途中から家に歸り、以來眞の信仰に志し、正しき品性を養うて、眞面目に其の職分を行ひつゝ、頻りに力量を磨いた結果、多年の後終に選ばれて米國の大統領と迄なつた。クリーブランドといふのは其の人であつた。然るに此のクリーブランドが青年時代に、一緒に酒を飲

んだ友人は、いつ迄も酒をやめないばかりか、段々悪から極悪へと深入をした結果、クリーブランドが大統領になつたといふ報道の各地に傳はる頃、彼は或る刑務所に囚人として、重き刑罰に處せられて居つたといふことである。

或時フィンランドの國に二人の若い婦人が居つた。一緒に連れ立つて或る集會に出席し、共に非常に感動する所があつたので、一人はその友達にむかひ、「御一緒に往つて、今説教した先生にお祈りをして戴かうではありませんか」といふと「私ははきまりが悪いから厭です」と答へて、どうしても同意しない故、「それでは私ひとり行つて、先生に祈つて戴きます」といひ、出ていつて神様に祈をして、歸つてからといふものは、彼女は非常に熱心なる信仰の人となつた。後にフィンランド救世軍の開拓者となつた、ハルトマン中佐といふのは、此の婦人であつた。けれども彼女と共に神様に祈をすることを否んだ今一人の若い婦人は、其の後どうなつたか、一向傳へらるゝ所がない。恐らく餘り涉々しい信仰生活は營み得



なかつたのであらう。

久しい以前、或る夜三人の青年が、横濱の市中を散歩するうち、向から救世軍の行軍が来るのに出會うた。其の一人が「救世軍に行つて見よう」と言ふと、他の二人は反對して、之を嘲り罵つた。かくて三人の中の一人だけ、其の夜救世軍の集會に来て悔改め、以來段々と信仰に進んだ結果、後には青年部の軍曹に任せられ、日曜學校の小さい兒たちに、聖書のことを教へるほどになつた。然るに彼と一緒に緒に散歩して居つた他の二人は、其の夜不動の緣日に行き、一杯のんで歸りに眞金町の遊廓に入り、始めて道樂の味を覺えたのが病みつきたつて、段々悪い事にはまり込み、後には他人の物を盗んだ廉で、刑務所に送らるゝことゝなつた。即ち前の一青年が救世軍で日曜學校の教師に任せらるゝ頃、他の二人は根岸の刑務所で、緒に着物をきて、懲役に處せられて居つたのである。

歌に「ゆく所、ゆかぬ所を辨へて、よぶとも行くな、よばずとも行け」とあり。

諸君は惡魔の誘惑を拒絶して神様に來り、基督に救はれて、あつぱれ有用にして幸福なる、聖徒の生活に入られねばならぬ。



三五 己に克ちて人に盡す

幾ら山海の珍味を列べたかというて、食ふ所は胃の腑を満す以上には出でないのである。幾ら大厦高樓に住んだかというて、眠るに疊一疊より広い場所は、要らないのである。それであるから私共は、贅澤な真似をしようよりも、身をつめて、精々簡易質素な生活を営み、餘裕があつたら、それだけ他人に盡したきものである。尺取蟲は屈んだだけ伸びる如く、私共は自分の身をつめただけ、それだけ、他人の爲に盡すことが出来るのである。

救世軍の創立者、大將ウイリアム・ブースが歐羅巴大陸に出征の砌、或る百萬長者の許に宿をせらるゝことゝなつた。しかるに彼は其の市に着くと直に集會に臨み、夜になつて漸く宿についたのであるが、百萬長者は自分たちの他に、親戚、友人、又其の地方の名ある人々を招き、大變な支度をして大將をもてなしたのである。

ある。やがて食卓に就くと、主人は大將にむかひ、「大將よ、料理番は特に巴里から、其の道に堪能な者を呼び寄せておきました。何でもお望みの食物を御注文下さい」とのこと。大將は痛み入つて「私是一向食量が少いので、餘り御馳走されると困ります」と言はれた。「それでは何か、軽い物を召上つて戴きたい。軽い肉汁は如何でせう、軽いお肴は如何でせう」と、下にも置かない待遇に、大將は全く挨拶に困り、「それではどうか、パンと牛乳を、少しだけ戴きたい」と言はれたので、百萬長者も、來賓も、料理人まで、全くあつけに取られたといふ話がある。大將は極めて簡易質素な生活を営みつゝ、専ら他人に盡す人物であつた。ヨンカーといふ人は獨逸人であるが、一枚の「とき」のこゑを讀んだのが本で、救世軍に引きつけられ、後身を献げて其の士官となり、十數年の忠實なる奉仕を續けた後、病を得て早く世を去つた。其の細かい物語はレイルトン中將著「ヨンカー大佐補」といふ書物に記してある。彼の遺言の中に、次の如き一節があつた。

己に克ちて人に盡す



た。

私の發明にかゝる、煉瓦製造器械の專賣權から得べき収入は、今後のこ  
 ず、獨逸に於ける救世軍の運動を進める爲に、その費用の内に加へて欲しい。  
 私は早くから、此の方面の収入を、悉く神様の御爲に使用することに定めて居  
 つたのである。必要ならその資本も利息も、まるで使用されて差支ないが、な  
 るべくならば、資本には手をつけないで、其の年々の収入だけを、末長く使用  
 してもらひたい。

遺言状には尙續いて、下の如く記してあつた。

私の死後、遺族の者が、若し私の此うした處置に就いて、不満を覺える  
 ことがあつたら、どうか左の二三の事を熟考してもらひたい。

第一、神様は救世軍を通じて、私の靈魂に大なる恵を與へ給うた。私は神様  
 に次いで、救世軍に負ふ所が最も多い。神様が私を救ひ、己と、世俗と、惡

魔とに打克たせ給うた大なる慈愛を思へば、私の此うした献物の如きは、眞に  
 言ふに足りないのである。

第二、神様は救世軍を通じて、祖國の爲に大なることをなし給うた。嘗に其  
 の小隊で兵士となつて居るもの、又は社會事業で便宜を與へられたものゝみな  
 らず、其の以外に、救世軍によりて直接間接に、祝福を受けて居るものは、數  
 へ切れないほど多い。諸教會も亦救世軍に刺激せられ、獎勵せられて、神様に  
 忠勤を挺んずるに至つた例が、甚だ多い。

第三、神様は又私が物質上、何物かを献げて其の御爲に盡せば盡すほど、  
 反つて益々豊に私を恵み給うた。私は神様に献物をした爲に、貧乏しない  
 で、反つて富んだのである。それにつけても私共は、益々、金錢を以て神様と  
 人との盡さねばならない。

基督の救は己に克つ力を私共に與へる。私共は基督を信じ、其の御救を受ける

己に克ちて人に盡す



ことによつて、一切の氣儘我儘に打克つ者とならねばならぬ。しかも斯く己が私に打克つことによつて、剩し得た時間を用ゐ、精力を用ゐ、金銭を用ゐて、他人の救の爲に盡瘁するようでありたい。私共は己に克つて、世の救の爲に戦ふ者とならねばならぬ。

### 三六 感謝の生活

「何事のおはしますかは知らねども、かたじけなさに涙こぼるる」と歌うた人がある。何事のおはしますかを知らないでさへ、然うであるから、まして神様の恵の有難いことわけを悟つた人々は、かたじけなさの餘り、神様を讚美せずには居られない。又神様に感謝せずには居られないのである。

或る救世軍人の言に「基督を信仰する以前は、電燈代を拂うことを知つても、天とう代を拂うことを知らなかつたが、今はそれが解つて、喜んで居ります」といふことであつた。所謂「天とう代」とは、毎日日光を照さるゝ恵の有難いことを知り、それにつけても、神様の爲に盡さねばならない、といふ意味であつたらしいのである。

それに就いて思ひ出すのは、米國のアリゾナに在る、一軒の宿屋のことである。



その宿屋には「太陽の些とも見えない日は、宿泊料不用」と書いてあり、雨模様の日には、無料で泊まらうと思つて、出かけるお客も少くないのであるが、さて唯の二三分間でも太陽の照さぬ日というては、殆んど少い故、宿屋は其の爲に些とも損をしないで、反つて益々繁昌して居るさうである。さういふことを考へると、私共はいよいよ「其の日を悪しき者の上にも、善き者の上にも昇ら」する神様に、感謝せねばならない。

トマス・エ・ベツケットの母ロヘスは、賢夫人であつたが、毎年わが子供の誕生日には、其のからだの目方をはかり、子供の成長を感謝するしるしに、之と同じ目方だけの金品を、貧しい人々に贈ることを、習慣として居つたさうである。

留岡幸助氏は貧しい中から苦學し、又迫害の間に基督教を信じて、あらゆる難儀を凌いだ後、今日では推しも推されもしない、第一流の社會事業家となられたのであるが、其の北海道社名淵の、家庭學校農場に設けられた會堂の眞正面には、

「有難」といふ二字を大書したのを、額として掲げて居られる。私共はお互に其の有難い宗教を體驗したいものである。

或る婦人が「よろこびの記」といふ日誌のやうなものを作り、ひまさへあれば、それを見て喜び、かつ神様に感謝して楽しく毎日を過して居るから、或人がそれを見せてもらうと、「今日は愛らしい女の兒と話しました」とか、「友達から親切な手紙をもらひました」とか、「日のいりが大層美しうございました」とか、「子供が病後、初めて外へ出ました」とか、「夫がバラの花を持ち歸りました」とかいふ如き、極めて平凡なありふれた出來事の中に、神様の恵と喜とを見出しては、感謝して居るのであつた。大事なのは此の心がけである。

新島襄氏は、「どうしたら誘惑に勝てますか」と問ふ人に答へて、「物事の暗い側を見ないで、明るい側を御覽なさい」と言はれた。或人が齒のぬけた老人にむかひ「おぢいさん、あなたは神様が有難い」といふけれども、齒がまるで脱けてし



まうた處だけは、有難くもあるまい」といふと。おぢいさんは答へて、「否、齒はまるで脱けたのではない、まだ二本だけのこつて居る。しかも其の二本の齒が、上下かつちりと、出あふ處にのこつて居るのだから、こんな有難い事はない」というた。そんな風に物事の明るい側を見て居れば、人間の一生は唯もう感謝あるのみである。

ルーテルの書いた物の中に、或る宗教家が、幼い折の耶蘇の御生涯の事を、もつと知りたいと熱望して居ると、或る夜の夢に、自分はナザレの村にて、耶蘇が幼き子供として、ヨセフとマリヤとの家に育つて居給ふ所へ訪づれると見た。ヨセフは入口の仕事場で大工の業をなし、其の傍に少年なる耶蘇が立つて居られる。そこへ隣の部屋からマリヤが「食事の支度が出来ました」というて、彼等と呼んだ。幼き耶蘇は食卓にむかひ、感謝して、食事を始めやうとして、不圖戸の隙間から窺うて居る其の宗教家の姿を見つけ、「お母様、あの方も呼んで一緒に御飯を

あげたら如何です」と、言はれると見てびつくりして拍子に、夢は破れたというてある。此の如く自分が三度の食事の戴けることを感謝するにつけても、私共は世の空腹に悩む人々の上をおぼえ、其の人々の爲に、心配することを忘れてはならない。私共は眞の感謝の生活を営みたまきものである。